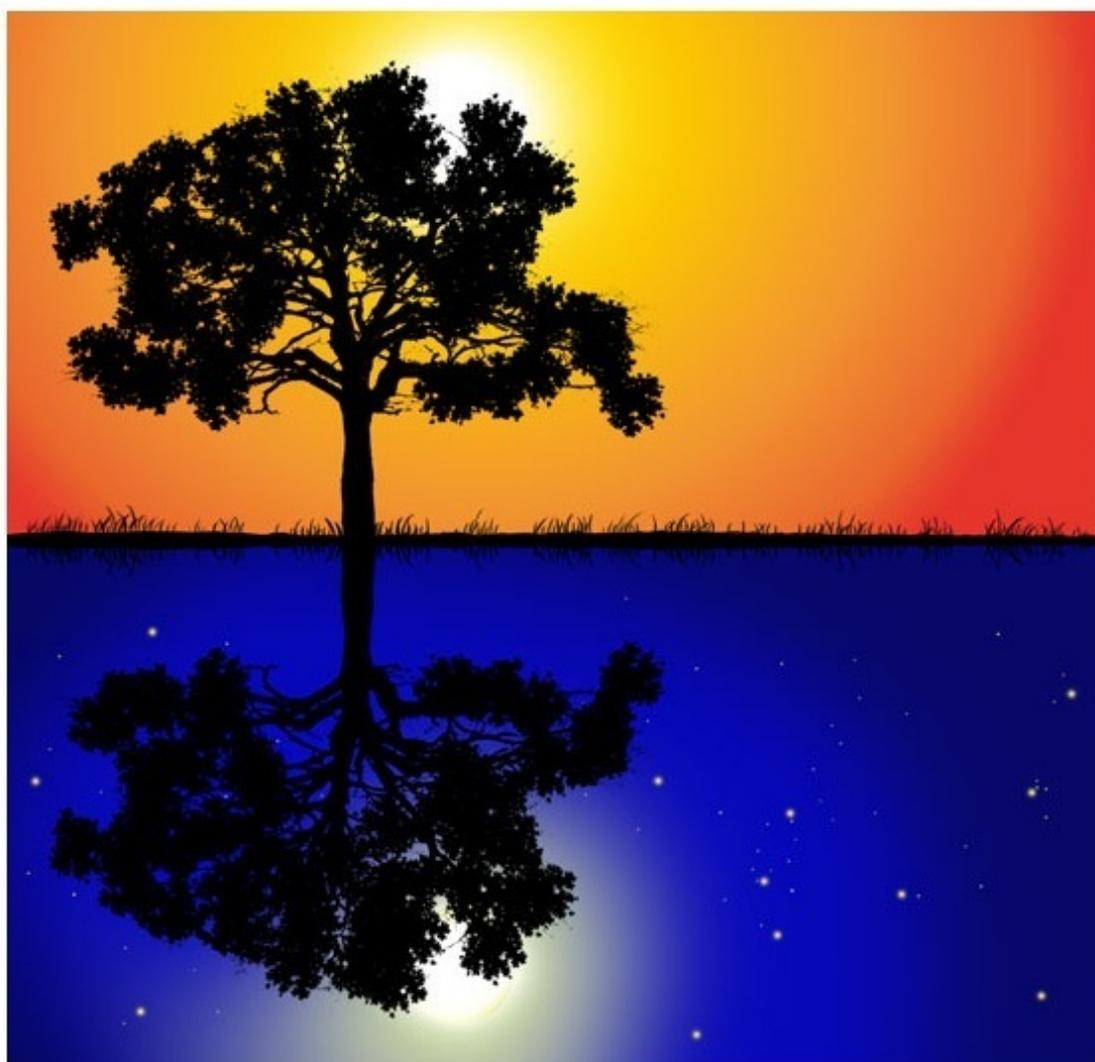


わかれのまえにみるけしき

yuhi



わかれのまえにみるけしき  
わかれたあとにするおもい

かさなって、つらなって  
ひそかにせかいはやさしくなる

# 目次

---

## 【エピソード0】

- #1 スプーン
- #2 見上げる飛行機
- #3 飛行機の中で
- #4 ある日の本屋
- #5 犬の字
- #6 ドーナッツ！
- #7 アイラビュー
- #8 犬サフラン
- #9 パエリアについて
- #10 心の脂肪
- #11 ため息と涙の理由
- #12 ノート
- #13 とあるカフェ
  - 【トモタケをめぐる日常】
- #14 走る理由
- #15 雨の日のトモタケさん
- #16 ビールかけ
- #17 春の花
  - 【岡本君との日々】
- #18 紙飛行機
- #19 別れの呪文
- #20 私がまだ少女だったころ
  - 【それぞれの事情】
- #21 天井
- #22 桜と天井
- #23 おみやげは蕎麦
- #24 もう片方
- #25 ハナ
- #26 わたげ
- #27 ポートレース
- #28 さよなら、ありがとう
  - 【たてうちくんとめぐる憧憬】
- #29 風になびく前髪
- #30 キャバクラの思い出
- #31 さよならのキス
- #32 アテレコ
- #33 恋
- #34 野球場に寄る
- #35 ケーナの音色
- #36 飛びつくことのできなかったボール
- #37 別れ際
- #38 カラオケ
- #39 お寿司を食べに
- #40 ありがとうのために
- #41 キラキラ
- #42 存在
- #43 涙
- #44 ラブレター
- #45 マジックアワー
  - 【エピソード ダ・カーボ】
- #46 スプーン

エピソード 0

## #1 スプーン

---

彼もそれを気に入ると私はわかっていた。『それ』というのは、お気に入りの雑貨屋で見つけた、スプーンのこと。そのスプーンは柄の部分が虹のようにアーチ状に反っていて、それはそれは使いずらそうなスプーンなのだ。なんたって親切にも“食べにくいことこの上なし！”と、素敵なポップが書かれているくらいなのだから。

「でも、可愛いね、なんか」

“でも”と初めに接続詞を付けて、彼の顔色を伺う。彼は興味深そうにそのスプーンを観察している。あ、やっぱりね。そんなふうに見てた時は、心が躍ってるときなのだ。私は彼の気が変わらぬうちに、「買っちゃおう」とスプーンを手にした。彼は笑みを浮かべながら、「食べにくいことこの上なしだけど？」と聞いてくる。

「いいの、置いてあるだけでも可愛いし」

そう言って、私はにっこりと笑い返した。ペアのスプーンを彼に渡す。「しょうがないなあ」とは言っていないけれど、そう言いたそうな顔をした彼が、とても愛しいものに見えた。

「どうかした？」

夕食にカレーを出して、私は彼に聞いた。彼と暮らし始めて4年が経つ。4年の間にわかったことは、何かを得ることは、何かを捨てることでもあるってことだ。たとえば彼の洗濯物を干す日常を得て、彼に対するときめきを捨てたような。別に彼が女心をわかっていないとは思わない。今でも誕生日は祝ってくれるし、デートだって億劫にならずに連れ出してくれる。なのに私は、それを4年前のように喜びに感じたりはしない。『何事ももう少し粘り強くなりましょう』そういえば、小学校の通知表に、そんなことが書いてあったような。急にそれを思い出して、私はふと反省をする。

「またカレー？」

いつもの口調で彼が聞く。

「好きでしょ、カレー」

いつもの口調で私も答える。

「好きだけど、ずっとだと、ちょっとね」

私はカレーがそこまで好きではない。だからと言って、彼のためにカレーを作るわけではなく、ただ単に何を作るか迷うと、カレーにしてしまうのだ。

「あ、いや、カレー好きだよ。毎日だって飽きないよ」

彼はそんなふうを遣ってくれる。でも、悪いけれど毎日飽きる。そんなことないよ、と彼は言うけれど、そんなことあるのだ。私はなんていったって、粘り強くないのだ。

「そんなことある。だから、今日はあのスプーンで食べてみよう」

私は本棚の上のスプーンを指さしていた。

「え、あれで？ “食べにくいことこの上なし”だよ？」

「いいの、いいの」

そうだ、粘り強くないのだから、少しでも変化していけばいいのだ。私はスプーンを水洗いすると「はい」と彼に手渡した。彼はあつけにとられながらも、そのスプーンでカレーを食べ始めた。私も同じようにそのスプーンを使い、カレーを食べ始める。

「うわ、ほんと、食べにくい」

手がグーになるうえに、腕も肩より上に上がってしまって、その不格好さに笑ってしまう。

「おいしい？」

そう聞いてみると、彼は素直に答えてくれた。

「おいしいよ、ありがとう」

なんの変哲もないその答えが、今日は特別にうれしく思えた。

## #2 見上げる飛行機

右手に巻いてある腕時計が止まっていた。携帯の充電もさっきなくなったところだ。こうして雑貨屋に来た理由は後回しにしておこう。とにかく今は時間が知りたい。そう思い、俺は店の壁がけ時計を見渡した。バラバラに時が刻まれる時計を眺めながら、本当の時間を探すけれど、どれが本当かわからない。ああ、そうか、こんなふうにあいつの気持ちを見失っていったのか。"あなたには私の気持ちはわからないわ"そう言って別れた妻の気持ちは結局、取り戻せないのだ。

「時計、お探しですか？」

壁がけ時計の前で立ち尽くす俺に、店員が声をかけた。そんなにももの欲しそうに見えたのだろうか。

「いいえ、時間合ってる時計、どれですか」

俺はそうやって、聞き返した。

「えっと、あ、あの時計、合ってますよ」

店員が指を差した時計の時間を確認する。ああ、そうか。もうすぐか。あと少しで、別れた妻と娘を乗せた飛行機が飛び立つ時間になる。妻の気持ちは取り戻せないけれど、まだ幼い娘は俺をどう思っているのだろうか。仕事の忙しさにかまけて、あまり相手をしなかったのは確かだ。俺は父親失格だろうか。せめてもの償いにと、娘が欲しいと言っていた、柄の部分が虹のように反りかえったスプーンを探しに雑貨屋に来たのだ。それは確かに売っていた。若いカップルがそのスプーンを手にして、楽しそうに笑っているのを見たとき、俺は胸が苦しくなった。"食べにくいことこのうえなし！"というそのスプーンなら、笑って食事ができたのだろうか。俺は時間を確認して、それからそっと店のドアを開けた。

外は雨が降り出していた。ざあざあ降りではなく、ぽとぽと落ちるような、そんな雨だ。傘を広げるまでもないけれど、雨の音を聞いていたいそんな気分で、店先に売っていた傘だけ買った。

「雨、降ってますか」

さっきの店員が釣銭を渡しながら聞いてくる。

「ええ、降ってますよ、小雨ですけど」

「そうですか。止んだら虹でも出ますかね」

「止むかわかりませんが」

「予報では午後は晴れると」

店員はそう言ってから、ありがとうございますと付け足した。また外に出て、傘の柄に付いたワンタッチのボタンを押した。やがて聞こえてきた雨の音。その音を聞いていると、心の隙間に優しい日々が落ちてきた。

「雨って楽しいね」

娘の声が聞こえてくる。たまの休みにはゆっくりと休んでいたのだけれど「お散歩したい」と娘はいつも俺にせびってきた。雨の日の散歩が彼女は好きなのだ。仕方なく俺は娘をつれて、外に出ることになる。

「楽しい？」

つなぐ小さな手から、楽しさが伝わってくる。

「うん！ 傘の音とかおもしろい！」

そう言ったあと、ランランランと、鼻歌を歌った。その歌がなんの歌かを俺は知らない。おそらく妻なら知っているのだろう。俺は今になってその歌が何かを知りたいと思う。けれど、娘はもういないのだ。ただそれだけのことが、どんなに俺の世界を温めていたのかを、いま、思い知る。

心のやり場がどうにも見つからない。雨の音にもせつなさが増してきているように思えて、傘を閉じてみた。それから記憶から逃れるように、ぽとぽとの雨の粒を数えてながら歩いた。1..... 2、3..... 4、5、6..... 7..... 369を数えたとき、公園にたどりついて、そこにあるベンチに腰を下ろした。

ランランラン。

気がつくともう鼻歌を歌っていた。「雨って楽しいね」と言った娘の顔が浮かんでくる。俺は空を見上げる。この上を飛行機が通らないか。その窓から、娘の顔が見えないか。視力が2億.0くらいあれば見えるかもしれない。

「あっ！」

雲の隙間に青空が見えた。そこに虹がかかっている。かすかだけれど、確かにかかっている。7色よりももっと温かい色の集合体。370、371..... 雨といっしょに、スプーンみたいな虹が。

### #3 飛行機の中で

---

「おかあさん、虹が見えるよ！」

窓を覗き込んで、女の子が声をあげる。

「そう、雨、やんだんだね」

母親は窓際に目をやるが、虹を確認できないようだ。

「ううん、雨はちょっと降ってる」

「そうなの？ おかしいねえ」

母親の口調は穏やかだ。通路を挟んだ、その隣の隣、私の席から虹は見えない。機内誌は隅々まで読んでしまった。そのあと、パラパラとページをめくる動作を繰り返していることに気がついた私は、その機内誌を元の場所に戻した。

「どうしておかしいの？」女の子が母親に聞き返している。

「虹は、雨が上がった後に、出るのよ」

「ふーん。でも、見えたよ、さっき」

「そっか。じゃあ、出てたんだね」

「おとうさんにも教えてあげたいなあ」

母親は聞こえていないのか、それには答えず、女の子の頭をなでていた。私はそのふたりの姿に見とれてしまっている。お父さんとは仕事かなにかでなかなか会えないのだろうか。今から久しぶりにお父さんに会いに行くのではないか。そうだったらいいな。そんなことを考えた次に、私はメモ帳とペンをとりだした。そして、その素敵な親子を描こうと、ペンを走らせた。

そうしながら、今、私が故郷へ帰る飛行機に乗っている訳を思い出す。行きの飛行機には確かに夢が乗っていて、それはそれはピカピカに光っていた。けれど今、この飛行機に私の夢は積まれていない。本当は画家になりたかったけれど、人に評価されると、私には才能がないのだとわかってしまった。それが私の答えだ。自信を失ってからというもの、すっかり絵を描くのをやめてしまったというのに、私はいま感じている。やっぱり私、絵を描くのが好きなんだ。こうしていると気持ちが喜んでいのがわかるもの。「好き」という言葉の全部みたいに、心が色づいてしまうんだもの。きっと、ただただ好きなんだ。こんなにも楽しく絵を描いたのは、久しぶりな気がする。見えない虹は描かなかったのだけど、出来上がったその絵に「虹」というタイトルを付けた。それから、有名人がするそれみたいに、自分のサインを入れた。子供の時からずっと変わらないそのサイン。それを機内誌に挟んでまた、隣の親子を眺めた。

「虹ってきれいだなあ」

女の子の言葉はため息のようだった。私が描けない虹は、彼女の目に映っているはずだ。

## #4 ある日の本屋

用もないのに本屋に立ち寄ることが彼の日課だ。日課というより、くせに近いものがあるのかもしれない。いや、くせと言ってしまうのは、彼には心外か。くせではなくルーティンだ。それをすることで集中できるような。たとえば、イチローがバッターボックスに入るときに見せる決まった仕草。彼にとってのそれは、本屋に立ち寄ることなのだ。けれど、その日は別の目的がちゃんとあった。その目的を果たすため、彼はまずはいつものように行動してみることにした。

いい年になったというのに「サンデー」と「マガジン」をチェックし、スポーツ雑誌とノンフィクションの棚をうろちょろする。それから写真集と詩集に目をやり、最後に文芸書を見て回る。そんな基本行動を実行しながら、彼はぼんやりと思う。「本にはすべてタイトルが付いているんだなあ」彼は腕組をした手をほどき、それをあごにもっていく。芥川龍之介か太宰治のようなポーズになる。そうした後、指を「フレミング左手の法則」の形に変えて、顔の前に持っていく。「ガリレオ」の湯川教授（東野敬語のミステリー。福山雅治が主演でドラマにもなった）の姿勢だ。残念なことに彼は福山雅治とは似ても似つかないのだけれど。ああ、そうだ、そんなことではなくて、と彼は思いなおす。「本にはタイトルがある」ということ。それは自分に付けられた名前のようなもの。「虹」と名付けられたその絵と同じ写真を、以前見た気がした彼は、ポケットからその絵が描かれた紙きれを取り出した。

彼がその絵を見つけたのは出張帰りの飛行機に乗っていた時のことだ。パラパラとめくった機内誌の間に、はさまっていた。親子が機内から窓を覗いている、ただそれだけの風景。郷愁を漂わせるその絵を、彼はこっそり持ち帰った。けどどうして「虹」なのだろう。虹はどこにも描かれてないというのに。彼が見た気がする写真には、虹が映っているのではないか。本屋へ来た目的は、その絵と同じ写真が載った本を見つけることだ。

けどそれは容易ではない。おそらくこんなふうの基本行動をとっていたときに見た写真だ。そう思って行動してみたものの、その写真には出会えない。探しているときってそんなものだ。恋に恋しているときと同じなのかもな。彼は紙切れをポケットにしまい、ため息をついた。すると、女性の書店員が彼に近付き、声をかけた。

「あの、落としましたよ」

ポケットにしまったはずの紙切れを、彼に手渡す。

「あ、すみません……」

そう言った声が上ずっていることに、彼は一瞬で気が付いた。明らかな動揺を隠せないまま、彼はごまかすように言葉が続けた。

「あの、この絵と同じ写真を探しているんですけどね」

紙切れを広げて、それを見せると、書店員はその絵を覗き込む。近付いた書店員の、女性らしい匂いが漂うと、彼の脈拍は少し速くなった。

「この絵の写真ですか…… 虹っていうタイトルなんですかね……」

書店員はそう言いながら、何冊かの本に手をかけてみる。その動きの一つ一つに彼は見とれてしまう。「うーん……」と考え込む様子すら愛らしい。でもなんだか面倒臭いことを頼んでるよなあ。そう彼は思い「あ、あの、だいじょうぶです。気にしないでください」と、冷静を装って伝えた。

「そうですか、申し訳ありません…… お役に立てなくて…… でも、その絵、なんだか素敵ですね」

「よかったら…… どうぞ」

彼は無意識にそんなセリフを吐いていた。

「え、でもそれ、大切なものではないんですか？」

「いや、あの…… 素敵だと思う人が持っていたほうが、その絵も喜ぶます、きっと」

書店員は少し困惑した表情を浮かべながら、それでもそれを受け取った。

「じゃあ、あの、預かっておきますね。この絵の写真見つけたら、連絡しますから」

「連絡なんていいです。ここよく来るので、そのときまた……」

「わかりました、お待ちしております」

彼はどうやら恋をした。あまりにも簡単に。でも、久しぶりに。

## #5 犬の字

素敵な絵を預かった。飛行機の中で、親子が窓を覗いている様子を描いた絵だ。「虹」というタイトルと、読み取れないサインが入っている。この絵と同じ写真がないかと、書店員である私は聞かれた。本のソムリエであるならば、どんなふうにしてもそれを見つけ出すことができたのだろうか。私はただのアルバイト店員だ。そんな知識を持ち合わせてるわけがない。それが、少し悔しかった。その人は、私にその絵をくれた。「素敵だと思う人が持っていたほうがいい」そう言って。私はそれをもらうのではなく、預かることにした。ちゃんとこの絵と同じ写真を見つけて、返そうと思うのだ。

そうは思うけれど、どうやって探せばいいか、まるで見当が付かない。聞かれたときも、探しているふりをしていただけだ。だから「大丈夫です」と言われたときはほっとした。私は本当に情けない。それでもなんとか努力してみようと思い、パソコンを開いてみた。ネット上なら、何か手掛かりがあるかもしれない。「虹 写真 親子 飛行機」と、検索ワードを追加していくが、その絵と同じ写真はやはり見つからななかつた。はぁ、とため息をつき、私は犬の字に寝転んだ。

「あっ」

左肩の上に目覚まし時計が転がっているのが見えた。「犬の字」じゃなくてじゃなくて「犬の字」になっている。そんなことを考えて、小さく吹き出したあと、思い出した。ここに目覚まし時計が転がっているのは、今朝起きたとき、猛烈な孤独感に襲われたからだ。誕生日だというのに、未来のない恋をしていることや、繰り返す代わり映えのない毎日を思い過ぎてしまって、淋しくて仕方がなくなった。その孤独感に追い打ちをかけるように目覚ましは鳴って、それを右手で払い落した。床に転がって目覚ましの音は止まったけれど、秒針が時を刻む音は、止まらない。怖い。ただ続いていく世界が。そんな気持ちに苛まれ、そのあと、私はわんわんと泣きわめいた。「わんわん」と。やっぱり「犬の字」で間違いない。そうたどり着いてまた吹き出したところに、携帯がブルブルと震えて、着信を知らせた。「彼」の名前が表示されている。それに出ると、彼は言った。

「誕生日、おめでとう」

それは世界でいちばんの安心をくれる声だ。

「ありがとう」

彼も同じ気持ちだといいなと思う。

「そっち、行っていい？」

「今から？」

「うん」

「部屋片付けるから、あと少ししたら、来て？」

「足の踏み場があれば俺はかまわないけど？」

と、冗談ばく彼は笑った。私の部屋はそこまで散らかってはいない。いつもなら、そんなことを言われるとムキになるのに、今日はそれをちゃんと受け止めた。

「足の踏み場だけじゃ、一緒に寝られないでしょ？」

彼は一瞬、言葉に詰まってから、「そうだね」と、優しい声で言った。花束もケーキもなくてもいいから、その声があればいい。

絵がテーブルから、ぱらっと落ちた。あしたまた、写真を探してみよう。「犬の字」の原因の目覚まし時計を元に戻して、バックの中の読みかけの文庫本に、その絵を挟んだ。

## #6 ドーナッツ！

お気に入りのケーキ屋がある。そのケーキ屋の自慢はケーキではない。ドーナッツがおいしいと評判のケーキ屋なのだ。人気ゆえに、そのドーナッツはいつも売り切れている。今日もまた売り切だろうなと思いつつ、バイト帰りのおれの足はその店に向かっている。とにかく今日はドーナッツの気分なのだ。店にたどり着いて、オシャレに飾られた少し重いドアを開ける。中に入ると花束を持った男が誕生日ケーキを選んでいる姿が見えた。ケーキに用がないおれは、その男の隙間からドーナッツがないかを確認する。男の足が邪魔でよくみえない。仕方ないかと、あきらめて顔をあげようとしたとき、男の背中にぶつかってしまった。

「あ、悪い」とおれが声を出す。

「あ、いいえ、こちらこそ」

そんなやりとりをしているとき、おれの目にドーナッツが飛び込んだ。

「あっ！」

思わず大きい声が出てしまう。

「え、なにか？」

男はおれに聞いてくる。ただドーナッツがあっただけでそんな声を出してしまったことに恥ずかしくなり、適当なことを男に告げる。

「あ、誕生日？ おめでとう」

男は困りながらも、

「ええ、彼女の誕生日で。ありがとうございます」

そう、笑顔で答えた。さわやかだ。男の左手の薬指には指輪が見える。奥さんを「彼女」と呼んでいるのだろうか。それとも別の「彼女」なのだろうか。そんな余計なことを一瞬考えた。おれがドーナッツを注文する間、その男は静かに店を出て行った。

「これ、何？」

家に帰ってドーナッツの箱をテーブルに置くと、彼女は少しいらついた。そりゃそうかとおれは反省をする。

「ドーナッツ」

とりあえずありのままに答えてみた。

「どうして2つあるの？」

「食べたくねえの？」

「ダイエット中なのに、誘惑しないでよ」

「好きなんだけど、今の体でも」

「体だけ？」

「心もだよ」

「合格」

あんまりサムイことは言いたくないが、そんなふうにご機嫌をとらないと、面倒臭いことになるのだ。頻繁に言葉にするのは得意ではないが、ドーナッツをおいしそうに食べる彼女の顔を見てると、体とか心とかじゃなくて、彼女そのものが愛しくなる。これは本当のことなのだ。おれは残り物の安いワインを手にとって、それをグラスに開ける。つまみにドーナッツ。大人と子供がごちゃまぜになる、至福の時だ。

「おいしいねえ、このドーナッツ」

ダイエットのことはどこかへ飛んでってしまったようだ。まあ、いいかとおれはひとりでにやける。

「ケーキやさんのだからなあ」

「ケーキやさんのって、どこの？」

「駅前の。そこのドーナッツ、人気だから、いつもねえの。あっても1個だし。今日はたまたま最後の2個が残ってたんだよ。こりゃ買うしかないっしょと思って。いやー、ラッキーだった」

おれがそんなふうによに浸っていると、彼女はふいにキスをした。その目は少し、潤んでいる様に見えた。

「どうだよ？」

「ありがとう」

ドーナッツだけでそんなに喜ぶとは意外で、おれは少し困惑した。

「そんなにうまかったか？ ドーナッツ」

彼女は笑っている。

「うん、おいしかった」

「そうか、よかった」

”1個だけしか残っていないときは買わずに、2個残ってるときに買ってきてくれたことがとてもうれしかった。”

そのときずっと一緒にいたいと初めて思ったのだと、数年後に彼女が教えてくれた。

それを知らないときのおれは、ワインとドーナッツと彼女があればいいと、おだやかな想いを味わっていた。

## #7 アイラビュー

カナタエリ。その名前は表札の真ん中にある。だんなさんと娘の名前にはさまれて、なんだかすごくあたたかそう。そう思いながら、ユウコはエリの子の家のチャイムを鳴らした。数秒後「はい」という声とともに、ドアが開いた。その瞬間、ぬくい空気が漂った。エリの子の家の空気だ。ユウコはそれにひどく安心感を覚える。

「あ、おかえり〜」

エリがそうおどける隣で、幼稚園に入ったばかりの「あや」という彼女の娘も同じように「おかえり〜」とユウコを出迎えた。

「ただいま。って、ここ、私の家じゃないって」

ユウコが笑いながら返すと、エリは、「"おかえり"がマイブームみたい、この子」そう言ってあやを抱きあげた。ふたりはユウコをリビングに導き「適当に座って」と指示をした。ユウコはエリの子の家には何度も来ている。だんなが帰ってくるのが遅いからと、ユウコをときどき呼び出すのだ。そしてエリはユウコに夜ごはんまで用意する。まるでお母さんみたいだとユウコは思い「いつもありがとうね、おかあさん」と言葉にした。「いいのいいの、私が呼び出してるんだから」そう言ってエリは笑う。「いいのいいの、ユウちゃんすきだから」あやはそう言って、エリの子の頭をなでた。

「ありがと。お礼にドーナッツをあげよう」

ユウコはバックにしまってあったドーナッツを取り出した。そうすると、エリとあやは、うれしそうな顔をした。

「あ、それ、ケーキ屋さんのドーナッツだ！」

袋のロゴを見てエリは驚いた顔になる。

「うん、店長の機嫌がよかったみたい」

ユウコの子の働くケーキ屋さんの、そのドーナッツは人気だ。数量限定ですぐに売り切れてしまう。暗黙の了解でそれをキープしておくのはご法度なのだが、店長が機嫌のいいときはわりとあっさりと買えるのだ。「ほんと？ ラッキーだったね。ありがとう」エリとあやは、もぐもぐとそれをほうばる。それを見ているとユウコは、あたたかく、しあわせな気分になった。

「あ、そうそう、今日もまたさ、あのひと来たんだけどね」

いつもお店に来ては、ショーケースを覗いただけで帰ってしまう男の子がいる。

「あのひとって、ショーケース君？」

エリはその人をそう呼んでいる。安易なネーミングだけれど、絶妙だとユウコは思っている。

「そう。今日初めて買っていったよ、ドーナッツ」

「へえ。ドーナッツ目当てだったんだ。ユウちゃん目当てじゃなかったんだね」

「ふられたの？」

あやが口を挟む。

「違う、違う」とユウコは笑って続ける。

「あ、でもさ、ドーナッツ、残ってるときも結構あったんだよね。なのに買っていかなかったから、ドーナッツ目当てでもないのかなって思った」

「やっぱり好きなんだ？」

彼女はにやにやしている。あやも同じ顔だ。確実に遺伝しているな。ユウコはまたあたたかくなった。「えっと……気になって聞いてみたの」

「おー、やっただ？」期待している顔だ。

「いつも来てますよねって」

「そしたら？」

「うん、いつも1個しか残ってないから買わなかったんだけどって」

「どういうこと？」

「今日は2個残ってたから、やっとな彼女と一緒に食べるって」

「ああ、ふられたのね……」

エリは残念そうな顔をした。それを見てユウコは申し訳なく思ったけれど、本当にただ気になっていただけなのだ。

「でも、そんなふうな想っていいなあって思って。ひとりで食べるより、ふたりで食べたいって思うようなさあ」

ユウコはしみじみとそんな言葉を吐いた。エリはニコッと微笑んで言った。

「ひとりよりふたり、ふたりより三人、パパが帰ってきたら四人、だね」

ああ、そうか。ユウコは思う。ドアが開いたときの、あのぬくい空気は家族の空気なんだ。私を邪険に扱う母親、どこにいるかもわからない父親、それには慣れて、私はつつましく生きてはいるけれど、私の中にはない空気がこの家にはある。彼女は私を家族のようにしてくれているのかなあ。ユウコは少し胸の奥がぎゅっとなる。

「アイラビュー、アイラビュー」

あやが拙い発音でゆっくりそう言葉にする。

「え？」

ユウコが戸惑っていると、

「それも最近、マイブームみたい」

そうエリが笑って教えた。ユウコは覚えてたの言葉みたいに、答えてみた。

「アイ、ラブ、ユー、トゥー」

## #8 犬サフラン

昼休みになるたびに、カナタさんは携帯電話を開く。そして「あやちゃん」の写真をぼくに見せ「可愛いだろ？」と迫る。間違いなく可愛いので「可愛いですね」と毎日同じことを返す。それはぼくにとって嫌なことではない。ぼくはまだ嫁も子供もないけれど、自分の子供が愛しいものだという事は、なんとなく理解できる。そんなことを言ってみるとカナタさんは「でも俺、今の奥さんと知り合うまでは、子供が愛しいなんて知らなかったんだよなあ」と、思い出したように言った。子供に好かれそうな穏やかな顔立ちをしているせいか、ぼくは勝手にカナタさんを根っからの子供好きだと思い込んでいた。だからそれは意外で、驚いてしまった。

「自分の子供だから、愛しいんですかね」

カナタさんは携帯電話を見ている。お気に入りの写真を探してる様子で、にやにやと口元が緩んでいる。

「これなんか最高に可愛くねえ？」

また目の前にあやちゃんが現れて、ぼくは「可愛いです」と本当のことを言った。そのあと、ぼくが「あ」と声を発したのは、あやちゃんの後ろに咲いている花を見たからだ。

「これ、"犬サフラン"ですよ？」

そう聞くと、カナタさんは「知ってた？」と感心したような顔をした。

「うちにもあるんですよ。前の彼女が置いていったんですけど」

その花は、土に植えることも水をやることもなく、日当たりのよいところに置いておくだけで、球根から花が直接咲くのだと、彼女は言っていた。その通り、何もしなくてもその球根から芽は出て、やがて淡紫色の花が咲いた。そしていつしか枯れたのだ。あのときの淡紫色の花が「あやちゃん」の写真の中にある。

「そうか、それはなかなか奇遇だな。俺もさ、結婚前に奥さんにもらったんだよ」

「え、そうなんですか。よく枯らしませんでしたね」

「なにもしなくても花は咲くけど、咲き続けるには愛がないとだめなのよね。結婚しても、枯らさない自信ある？って、言われてさ」

「つまり、一生愛してくれってことですか、奥さんも花も」

「そういうことだな。枯れたら別れるとかいうかもしれないから、こっそりばれないように植え替えてる。植えればけっこう持つもんだよ」

カナタさんは笑って、またあやちゃんを眺めた。カナタさんがあやちゃんを愛しく思うのはきっと、奥さんを愛しく思う延長線上なのだろう。そうやって愛しいものが増えていくのは、すごく大切なことなのだ、きっと。犬サフランを枯らしてしまったぼくはまだ、愛しいものを咲かせ続ける想いが足りない。そんな気がした。

## #9 パエリアについて

”今日はコロッケにしてください。材料は冷蔵庫にあります”

いつからそうなったのかはもう忘れてしまった。とにかく”母が買ってきた材料で、私が晩ごはんを作る”というのが、ふたり暮らしの我が家のルールになっている。はじめて「パエリア」を作ってくれと言われた時は困った。「パエリア」なんて言葉、聞いたこともなかったのだから。そのせいで私の部屋には料理の本ばかりが並ぶ。「パエリア」はスペインのバレンシア地方の郷土料理だと、そのときはじめて知った。だいたい純日本人顔の母から「パエリア」なんておしゃれな横文字が出てくるとは思わなかった。理由を聞けば、「スマスマ」でキムタクが作っていたからと、なんとも母らしい答えで、私はあきれってしまったけれど。パエリアはなんとか形になってできたけれど、もともとの味を知らなかったの、成功か失敗かの判断もできなかった。それでも母は「おいしい」と言っていたので、よかったことにする。まあ、私はスペインで暮らす予定もないから、これでいいのだ。そんな感じで私の料理のレパートリーだけは増えていった。

今日はコロッケか。コロッケも元は外国料理だというが、これだけ日本人になじみがあるのならもう、日本の家庭料理と言ってもいい。私はパエリアよりも、コロッケの味を知っている。タマネギを切っただけで涙しながらそんなことを考えていた。それからまたパエリアのことを思い出した。

「サフランっていうのは入れた？買うの忘れちゃったんだけど」

パエリアを食べているとき母が言った。

「サフラン？ ああ、レシピには書いてあったけど、高いらしいよ」

「そう、じゃあなくてもいいね」

「そうそう、おいしいでしょ？」

「おいしいよ」

「なら問題ないじゃん」

私たちはそうやって笑った。

私はまだタマネギを切っている。そしてまた違うことを思い出している。サフランというスパイスは、その名の通りサフランの花から摘み取られている。パエリアに入れなかったサフランの花が気になった私は、園芸店に出向き、サフランを探した。そこで私はサフランではなく「犬サフラン」という花の球根を見つけた。犬サフランは、土や水は必要ではなく、置いたままでも花は咲くけれど、毒性があり、あやまって食べると死にいたることもあるのだと、園芸店のおじさんは教えてくれた。「球根は、タマネギに似てるからねえ」おじさんがそう笑ってるのを思い出して、タマネギを刻んでいる私の目からまた涙がこぼれてきた。私は犬サフランの球根を買い、当時付き合っていた恋人にそれをあげたのだ。あげて少したったあと、私たちは別れてしまった。別れたショックで、彼はタマネギと間違っただけで食べたりしてないだろうか。そんなことするはずがないとわかってはいるけれど、なぜか不安が心にうずまいている。どうしよう。ちゃんと生きているのか確認したくなってしまった。だけど、だめだ。私たちはもう別れたのだ。きっと私じゃない誰かがちゃんと心配してくれている。そうだ、だから大丈夫だ。私の知っている彼は、そんなに弱いひとではないのだ。

「ちょっと切り過ぎじゃない、タマネギ」

知らぬ間に母が帰ってきていて、私に言った。

「え、あ、おかえり」

「ただいま。タマネギしか切っていないし。仕方ないから、じゃがいもは母さんがやるわ」

私はその言葉におどろく。

「なに驚いてるの？母さん、実はコロッケだけは得意なんだから」

「コロッケだけって」

そう笑って返すと「泣いてるのか笑ってるのかよくわかんない顔してるねえ。面白い子」と母はふふふと小さく笑う

。

「ていうか、キャベツ忘れたでしょ？」

母は「あっ」と声を出したあと、「でも、プリンは買って来た」と、自慢げに言った。私はちゃんと、心配されている。そういうことは大切なんだなと思いながらまた、タマネギを刻んだ。

## #10 心の脂肪

---

わりと空いた電車の中で、その人はぼくと同じようにドアにもたれかかっていた。座らない理由は、はじっこが埋まっているからだろうか。斜め前のはじっこの席では女子高生が文庫本を読んでいる。その、はす向かいのはじっこの席ではおじさんが手すりに顔をうずめている。その対面のはじっこの席では、小さなこどもが靴をぬいで窓にへばりつき、母親がとなりでメールを打っている。それぞれの時間が流れていると、ぼくは腕組をして思う。そしてまたふと視線を戻すと、ドアにもたれかかるその人に光が差し込んでいた。それはまるでスポットライトに照らされたいに。ぼくはその人に見とれてしまった。そして、そのにおいにも。

それはその人のにおいではなく、彼女の手にはぶら下がった箱に入っているプリンのおいだ。箱に入っているのがプリンだと、凡人にはわかるまい。だけどぼくにはわかる。不思議なことに、プリンのおいだけには敏感な嗅覚があるのだ。その能力の活かし方がわからないまま、大人になってしまったのだけれど。その人とプリンを見つめ続けるのはあやしいので、ぼくはふっと視線を外し窓の外をながめた。流れる風景はいつも通りだ。いつも通りの毎日が過ぎていくようにこうやって、心の景色も流れていく。

そういえば。「イチローがね、”歳を取っていくと心の脂肪がたまるから、それをためないようにしていかなくちやいけない”って言ってたよ」昔の彼女がそんなことを言っていた。

「心の脂肪って？」

「うーん、なんかよくわからないけど、歳を取るといろんなことを知ってしまって、シンプルなものが見えにくくなるっていうようなことだった気がする」

曖昧な記憶に浮かんできたのは、そんな曖昧な彼女の解釈だった。

シンプルなもの。それってどういうことだろう。好きなものを好きでいつづける想いだろうか。太陽に照らされたビルが窓を突き抜けて車内に影を落とす。流れている景色とともに、それは形を変える。形を変えながらも、好きでいつづけるものもきっとある。

そんなことを考えているとき、電車は次の駅に到着して、ぼくの前からプリンのおいが遠ざかった。その人は駅を降りる間際、はじっこに座る女子高生にハンカチを差し出した。文庫本を読みながら、いつのまにか涙を流していたようだ。

「よかったら」

「あ、ありがとうございます……」

そうして女子高生が涙を拭きとっている間、ドアが閉まる音がした。

「え、あ、あの、これ！」

女子高生は立ち上がったが、ドアは完全に閉まりきり、電車は間もなく動き出した。何事もなかったようにハンカチを差し出した彼女が、ホームをゆっくり歩いていくのをぼくは見ていた。彼女には心の脂肪があまりついていないのだ、きっと。まだかすかに残るプリンのおいにお包まれて、ぼくはまた外の景色をながめた。

## #11 ため息と涙の理由

---

帰りの電車に乗り込むと、ちょうどはじっここの席が空いていた。私はそこにため息をつきながら座る。ため息の理由はとてもつまらないことだ。今朝の食事は母の手抜きで、昨日の残りのカレーだった。母が手抜きをすることはかまわないのだけれど、そのカレーを食べる「あたらさん」に少しいらついでしまった。

「一晩かけたカレーはおいしいね」

母の再婚相手であるその人を、まだ私は「お父さん」とは呼んではいない。「あたらさん」というその人の名字で呼んでいる。私も同じ名字が変わっただけだ。だからって別に嫌いなわけでもない。けれどやっぱりまだ私に気を遣う感じには慣れていないのだ。

「あ、そうですね」

そう返す言葉もぎこちない。

「そろそろ敬語やめなさい。家族なんだから」

手抜きした母がそう言う。

「いや、無理しなくていいよ。自然にそうなればいいんだし」

と言いながら、あたらさんはカレーにソースをかけた。カレーにソースをかける意味がわからない私は、それでいらついでしまう。

「おいしいんですか、それ？」

「うん、おいしいよ。食べてみるかい？」

とてもとても食べる気にはなれない。

「いいです。私にはちょっとそれはいいです」

「じゃあ、何をかけるの？」

「何もかけないですよ。だってルーがかかっているじゃないですか」

「そっか。そう言われてみればそうかもね」

そう言ったあとのあたらさんは少し淋しそうな顔をした。私はそれを申しわけなく思いながら、いらつきを抑えられずにそのまま学校へ向かった。

そんなつまらない理由で一日を不機嫌なまま過ごし、こうして帰りの電車の中でため息をついている。ため息では下に落ちていくばかりなので、上に向かって息を吹きかけてみた。前髪がそれでふわっとなびくと、見上げた棚の上に本が置いてあるのを発見した。誰かが忘れていってしまったのだろうか。私はふいにそれを手に取り、パラパラとページをめくる。どうやら小説のようだ。なんとなく目を通しはじめると、いつのまにか夢中になった。それはもう「ガタンゴトン」の音さえ聞こえなくなるほどに。そんなふうに物語に入り込んでいて、気がつくやうに文字がにじんだ。それが涙だったことを知り、あわてて指でぬぐっていると、「よかったら」と目の前にハンカチが差し出されていた。その人は若い感じではないけれど髪が長い綺麗な女性だった。

「あ、ありがとうございます……」

私は反射的にそれを受け取って、涙をふいた。そしてハンカチを返そうと思った時、ドアが閉まり、その人もホームを降りてしまった。

「え、あ、あの、これ！」

その声が車内に響いて、私は少し恥ずかしくなってしまう。そしてまた小説を読むふりをした。さっきまであんなに夢中になっていたのに、急に頭は違うことを考え出して、私はハンカチで目を抑えた。

帰ったら、もう少し素直になって、あたらさんと話してみよう。

今日はこんなことがあったんだよ。

そんな他愛もないことを話してみることにしよう。カレーにソースをかけたりもしてみよう。意外とおいしいのかもしれないし。ハンカチをしまうと、小さな笑みがこぼれたのがわかった。

## #12 ノート

---

黒板に響くチョークの音が小気味よいリズムを刻んでいる。その音に耳を傾けながら、彼は隣の席の女子生徒のノートに言葉を記す。“今日、一緒に帰ろう？”彼女の反応はいつもに増して速い。“やだ”彼のノートにそう記される。彼は彼女が好きだ。でも彼女は彼を好きではない。何度もふられているのだから、彼もそれくらいのことには自覚している。

“どうして？”

彼はあきらめが悪いのだ。あきらめたらそこで試合終了だと、安西先生—「スラムダンク」という漫画の話だ—も言っていた。じゃあ、逆に試合を終わらせたかったらあきらめることか。そんなことを考える彼のノートに彼女の文字が記される。

“ひとりでいたい気分なんだもん”

その「なんだもん」の可愛さにきゅんとなり、彼は耳たぶを赤く染めた。わかってるよ、ぼくが簡単な男だってことは。だけどこんなにも好きなんだ。

“ひとりでいるとどんなことを思うか知ってる？”

それを読んでから、彼女は彼のほうに視線を向けた。

カタカタカタ...カタッ。小気味良かったチョークのリズムがそこで止まる。彼と彼女は敏感に前を向いた。「...人間の体の細胞というのは、およそ六十兆個あると言われ、毎日死と再生を繰り返しています。そして六年ほどで全体的に細胞は新しく生まれ変わります。ということは、十七才前後の君たちは、いま3回目の生まれ変わりをしているとも言えるのかもしれませんが。その時期が不安定であるのは当然なんですね」

そう説明してまた、チョークがカタカタとリズムを刻みだした。そうか、生物の授業だったか。

“どんなことを思うの？”

彼女の文字が再び彼のノートに。

“誰かといたいと思うんだよ。だから、一緒に帰ろう？”

彼はもう彼女が好きだとは言わない。でも、好きだと言ってるのと変わらないことを言っている。だからきっと、振られ続ける。

“やだ”

ほらね、やっぱり。

“清水はちょっとがんこだ”

“清水じゃないよ。「あたら」だよ”

“ごめん。そっちのほう呼び慣れたるから”

彼女は母親が再婚し、名字が変わったのだ。

”別にいいけどね”

”じゃあ、名前でも呼んでもいい？”

”やだ”

もう、その”やだ”の文字さえ愛おしいと彼は思っている。このさき彼は彼女にどれだけふられるだろう。そんな死と再生の毎日なら、六年だって十二年だって十八年だって、ずっと彼女を好きでい続ける。彼女が幸せになるまでは。本気で彼は、そう思っている。

## #13 とあるカフェ

学校での仕事を終え、待ち合わせのカフェに向かう途中で、ジョギングをするランナーとすれ違った。彼の吐く息のリズムと風の音に胸が高鳴り、カフェまでのあと少しの道を走ることにした。そうしてカフェに着いて、いつもの席に座っている彼女を見つけると、ぼくは息を整えた。そして穏やかに声をかける。

「となり、いいですか？」

「あら、水しかありませんけれど」

わざとらしく彼女はそんな言葉をつぶやく。まだ息が上がっているのを見抜かれたようだ。

「じゃあ、その水で給水を」

「どうしようかしら」

迷ったそぶりを演じながら、彼女はおかしくなってきたのか、くすくすと小さく笑った。

「走ってきたの？」

「ああ、走りたくなって」

「若いね」

「若くないから、ちょっと疲れた」

そう言いながら、彼女の対面に座った。彼女の先に若いカップルが横並びで座っているのが見える。横並びで座っても絵になるのが若さというものか。十九のころのぼくらなら、そうしていても絵になったのだろう。今は横並びで座るのは、少し違和感がある。夫婦でも、恋人同士でもないのだし。息もようやく落ち着いて、ぼくはそんなことをぼんやりと思った。

「何考えてるの？」

ふいに彼女が聞いてきて、ぼくは違うことを答えることにした。

「人間には六十兆もの細胞があってさ、日々、死と再生を繰り返していて、だいたい六年ですべての細胞が新しく生まれ変わるっていう話をしたんだ、学校で」

「うん」

「で、帰りにある生徒に聞かれたんだけどさ」

「うん」

「先生はもう六回くらい生まれ変わってると思うんですけど、変わらないものはあるんですかって」

「変わらないものかあ…… なんて答えたの？」

「あるよって」

「言い切ったんだ」

「ああ」

言い切れる自信はない。けれどぼくには、そう言いきってあげることが大切だと思ったのだ。そういう言葉の力を、彼はきっと知っているだろうから。そんなことを口にせずとも、彼女はぼくの真意を汲み取ったように答えをくれた。

「そうしてあげるのがいいね」

彼女はそう言って、コーヒーを口にした。もしかしたら。夫婦でも恋人でもない彼女とこうしていることは、今までずっと変わらずにいたことかもしれない。十九のころと、座る場所は変わったけれど、ぼくらの心の場所は変わらずにいるのかもしれない。

「結婚しないの？」

と、ぼくは今まで何度聞いたかわからないことをまた聞いてみる。

「そっちは？」

何度となく聞かされた言葉が返ってくる。

「どうだかね」

彼女もそれを真似してくる。

「どうだかね」

やっぱりこの心地良さはまだ、変わることはなさそうだ。

トモタケをめぐる日常

## #14 走る理由

夕暮れの街を走っているとき、ふと思い出したセリフがある。

「どうして走っているのかを聞かれれば、それはどうして生きているかという意味と同じだ」

陸上部だった「友竹」という名の友達はそのように言った。友竹は高校時代は全国にも名を轟かすような名ランナーだった。ぼくはただのクラスメイトで、ノートに詩を書いて満足するような、そんな高校生だった。友竹に何げなくきいた「どうして走っているのか」に対する答えは、あのときでさえかっこいいと思ったのだが、いまは、さらに光り輝いている。それはぼくが「どうして走ってるのかを聞かれれば少し出てきた下腹部をへっこませたいためだ」と悲しい理由で走っているからなのだ。不摂生のたまものそれと闘うのも、単にモテただけだと気がつき、自分がとてもちっぽけに思えた。だけど切実なのだ。

そんなことを思いながら走っていると、前からくる自転車が少しよろめいて、ぼくの走るコースを邪魔した。ぼくは体をひねってその自転車をよけたが、そのとき少し足首を痛めたことに気がついた。その場にしゃがみこんで、足首を抑えていると、道端に座り、詩を売る人の姿が目に入った。そして、そこに飾られた詩をなにげなく目で追った。

”あきらめるな、走り続けろ”

それが詩として素晴らしいのかはわからないけれど、ぼくがハッとしたのはその言葉自体ではない。そこに記された、作者のハンコ。「トモタケ」。もしかして。ぼくは帽子を目深にかぶったその人を覗き込んだ。そして、「友竹」のしるしである右目の下の泣きぼくろを確認した。

「きみはどうして走っているんだ？」

その声を聞いて、彼が友竹であることを確信したぼくは、試すように答えてみることにした。

「それはどうして生きているかという意味と同じだ」

それを聞いた友竹は安心したように顔をあげた。

「ひさしぶり、やっちゃん」

いまはもう誰もそんな呼び方をしない。だからそれがおかしくて笑ってしまった。

「ひさしぶり。詩人になったの？」

友竹は首を横に振った。

「昼間は普通の会社員。でもたまにこうしてる」

「そうか。友竹はずっと走ってるのかと思ってたよ」

「やっちゃんが走っていて、俺が詩を書いているなんて、まるで逆だな」

言われてみればそれはそうだと気がついた。ぼくはもう詩を書いたりはしない。友竹も走らないのだろうか。”あきらめるな、走り続けろ”それを眺めて、ぼくは聞いた。

「走らないの？」

友竹は少し間をおいてから答えた。

「どうして走っているのかって聞かれて、どうして生きてるのかってという答えと同じだと言ったんだよな、俺」

「あれ、かっこいいセリフだね。ぼくなにかさ、このちょっと出てきた腹をなんとかしたいだけで走ってたよ」

ぼくは自虐的に笑う。友竹はそれにつられることなく、淡々と言う。

「そんな理由のほうが、すげーかっこいいと俺は思うよ。生きている意味と同じだ、なんて、生きている意味がわからなかっただけだな。今になってわかってきた。なんのために走っているかってわかっているほうが、すげー楽しい」

「もしかしてあの頃は走ってるの楽しくなかったの？」

「楽しいとか楽しくないとか、そんなこと思う余裕もなかったかもな」

そうなのか。ぼくとはまるで違う世界で、友竹はそんなふうに使っていたのか。それは少し淋しい気がした。けれど友竹が「これ、やるよ」と言って、”あきらめるな、走り続けろ”の詩をぼくに差し出したとき、その淋しさは笑いに変わった。

「あきらめないで、ダイエットしろ」

たぶん友竹も、あきらめずに走り続けているのだ。それがわかってぼくはうれしくなった。

「こんど飲みに行こう？」

そう誘ってみると、「腹がへこんだらな」と、笑った。ぼくらはまだまだ人生を、走り続ける。この腹をへこませるためにもだ。

## #15 雨の日のトモタケさん

その日は朝から雨が降っていた。私は雨の日が好きだ。授業中何度も、教室の窓に当たる雨粒を見つめては、あれは涙の形をしている、あれはハートだ、そんなことをただ心に浮かべる。そんなちっぽけなことが好きなのだ。

休み時間になると、クラスメイトはきゃっきゃと若い声を上げる。私も若いはずなのだけど、そんなふうにははしゃげなくて、どこか居心地の悪さを感じている。だけど、話しかけてくれる友達はあるし、特別に私を敵視する人がいるわけでもない。それなりのコミュニケーションを取りながら、学校生活を送っている。

だけど足りない。それが何かはわからないけれど、とにかく「足りない」。きゃっきゃと声をあげるその理由が、「恋」だったり、「夢」だったり、「友情」だったり、そういうものだとしたら、私にはそれが欠けているのだろうか。「恋」ではないけれど、私には逢いたい人がいる。

学校が終わると、誰にも遠慮せず一目散に帰り道を急いだ。涙やハートの形をした雨粒は空に還って、雲の隙間から青い色が少し見える。それは私の気持ちを映しているかのようだ。その人がいる場所までくると、そこで立ち止まり声をかけた。

「こんばんは」

その人も「こんばんは」といつものように返してくれた。その声には私は安心する。

「今日は売れましたか？」

その人は「トモタケさん」といって、路上で詩を売る詩人だ。二十代後半で昼間は会社勤めをしていると言っていた。いつも帰り道で見かけているうち、いつのまにか彼と話すようになった。今日も彼の詩は見た限りではあまり売れていない。

「うん、売れてないよ」

トモタケさんはおだやかにそう言って、笑う。

「よかった」

「相変わらずきみは失礼だな」

それも冗談だとわかる。

「だって、売れたらこんなふうに話したりできないじゃないですか。だから、売れなくてうれしいんです」

本心なのだけど、やっぱり少し失礼かもしれない。そう思って反省した。けれどトモタケさんは気にせず返事をする。

「そうか、それはたぶんいいことだな。ありがとう」

彼と話すと私は足りないものが足りたような気持ちになる。それは学校でも家でも得られないものなのだ。そんなことを伝えると、トモタケさんは言った。

「学校や家には安心感はないの？」

私は素直に答えた。

「私、たぶん恵まれてると思うんです。家には両親がいるし、友達もないこともないし。だけど、何かが足りないんです。それが何かわからないけど。恋とか夢とか、そういうものともちょっと違う「何か」が足りなくて…… トモタケさんは高校生のときはどうでしたか？」

トモタケさんの右目の下の泣きぼくろが私は可愛いと思う。なんて全然関係ないことをふと思っていた。

「俺も似たようなものだったよ、きっと。それって普通のことだから。でもね、ある日突然わかったりすることがある…… ああ、そうそう「失われた時を求めて」っていう超長い小説があるんだけど、知ってる？」

泣きぼくろが、今は止んでいる雨の粒みたくに見える。

「いえ、知りません。」

「不安を抱えながら生きてる青年が、ある日敷石につまずいて小説を書こうと思った。簡単に言うとそんな話なんだけど」

「それ、簡単すぎませんか？ 超長いんでしょ？」

「うん、でもどんなに長く説明しても、結局言いたいことなんて、たった一つだったりするんだよ。そう、そうやって突然何かがわかるって瞬間があるってことをね、言いたかったのだけど」

そうなのかな。もやもやしている何かが、はじけ飛ぶように「そうだ！」とわかったりするのかな。私にはまだそのもやもやは消えないけれど、トモタケさんが言うと、そんな気がしてくる。トモタケさんの泣きぼくろの角度が少し上がっている。それは、泣きぼくろが「笑いぼくろ」になった瞬間だ。

あ。わかった。私、トモタケさんのその顔が好きだ。

「ありがとう。トモタケさん」

「こちらこそ。きみと話すのは、とても楽しい」

涙の形、ハートの形、それを溶かした雨上がりの匂いが、優しくて好きだった。

## #16 ビールかけ

「脳科学的には異性の間に友情は成立しません。同性といるときの脳の働きを友情とするなら、異性といるときに働いている脳は、恋愛のときに働く脳と同じだからです」

ふとつけたテレビの中で、学者がそう言っていた。俺は別れた彼女からのメールを読み返しながらか、缶ビールの蓋を開けた。ドレッシングや缶ジュースを無意識に振ってしまうくせがある俺は、それが缶ビールだってことを忘れていて、蓋を開けた途端にその泡が顔に飛び込んできた。

「私、あなたにもう甘えられない。本当はずっと友達でいたいけど、それって、難しいよね……」

携帯電話の画面にビールの泡がかかって、その文字がにじんだ。すぐにそれを拭き取ったけれど、防水機能が付いていることを思い出した。いらぬ機能だと思っていたけど、こんな風に役に立つなんて。テレビからセパレートタイプの携帯電話のCMが流れる。それもどうやって役に立てたらいいか、まるで思いつかない。でも、それもきっと誰かが、あったらいいなと思って作ったのだ。誰かにとってそれは、役に立つものになるのだろう。そんなことを考えながら画面を拭き取った。表情を変えることのない文字は、いつまでも優しく困るばかりだ。いっそ、壊れてしまえばよかったのか。

「ギャル文字にでも変えてみようか」

いつか、笑いながら彼女はそう言って、俺の携帯をいじり、メールの文字を変えてみせた。

「ははは、似合わないよ、その文字」

「でも、面白いでしょ？」

「うん、面白い」

俺はその時のように、メールの文字を変えてみる。やっぱり似合わないその文字を読みながら、それでも優しがるその気持ちが俺の心をぎゅっとつかむ。そのとき、電話がかかってきた。

「もしもし」

付き合いの古い女友達の声だ。

「久しぶり」

おそらく3年は連絡していない。それでも昨日も会ったかのような声を出していた。それは彼女も同じだ。

「久しぶり。飲む？」

彼女はいつでも唐突すぎる。

「飲みたいの？」

「まあね」

「もう飲んでるから」

「なんだ、出来上がったんだ」

「あのさ、脳科学的には、異性の間に友情は成立しないらしいんだけど、どう思う？」

ビールの匂いに包まれて、俺がそんなことをぼけーと言葉にすると、彼女はせきを切ったようにしゃべり出した。

「同性同士の友情と異性の友情は違うんじゃないの？ 同性と同じように友情を求めるからごちゃごちゃするんだよ。もっと言ったら、その人同士でしか築けない関係があるのに、それを言葉にしようなんてなくていいのに、まったく……」

「いいこと言うね」

「…… って、道端にいた詩人が言った」

「詩人？」

「うん。よくいるでしょ、路上で詩を書いている人」

「ああ、なるほど」

「その人と飲んでる、いま」

「そうか。楽しそうよかった」

「うん、ありがとう」

俺は何か適当な理由をつけて、電話を切った。本当の理由はまた彼女のメールを読み返したくなった、ただそれだけのことなのだけれど。もしかしてセパレートタイプの携帯電話は、そういうときは役に立つのかもしれない。また友達

に戻れるだろうか。恋人になろうなんて思わないから、ただ、話がしたいと思える関係になれるだろうか。それともいつかすべてを、忘れてしまうのだろうか。2杯目のビールも無意識に振ってしまう。蓋をあける前にそれに気が付いたけれど、迷うことなく開けた。ひとりでビールかけだ。そのにおいに、いまは埋もれていたかった。

## #17 春の花

---

仕事帰り、駅へと向かう道でのことだ。

前を歩く男のポケットから紙切れが落ちて、私はそれを拾った。

”書を捨てよ、旅に出よう”

紙切れには、たった一行、そう綴られていた。

私は彼の肩をたたき、「落ちましたよ」と、それを差し出した。

「ああ、どうも」

そっけなく男はそう言ってすぐさま歩き出そうとした。別にお礼を言われたかったわけじゃないけれど、あまりにもそっけないその態度が気に食わなかった。だから思いがけず「ちょっと！」と声をあげてしまった。たぶん、仕事の疲れでイライラしていたのだ。八つ当たりするのは筋違いだと、すぐさま反省したけれど、もう遅い。男は私の声に反応して、振り返った。

「え？」

私は、少し抑え気味に男に言った。

「いや、えっと、それ…… ”書を捨てよ、町へ出よう”の間違いじゃないの？」

八つ当たりを寸前で回避して、そんなことを口にしていた。男は少し感心した顔で答えた。

「へえ、寺山修司、知ってるの？」

「え、あ、まあ……」

そういうタイトルの本があることだけ知っていたけれど、“テラヤマシュージ”という名前には、ピンときていない。私は言葉に詰まった。

「へえ、そうかそうか。ああ、ほんとは”町へ出よう”なんだけどさ、ちょっとモジッて変えてみたんだ」

そう言いながら、彼は私が返した紙切れを差し出した。

「え？」

「旅に出たらどう？」

彼は私の手のひらに紙切れを置き、両手で私の手を包むようにそれを持たせた。不覚にもそれにドキッとしてしまう

。

「そうだなあ…… 電車にでも乗って、離れたところにいる、大切な人にでも逢いに行ったらいいよ」

私は驚く。私がいま逢いたいと思っている人は、離れたところに住んでいるのだ。

「え、どうしてわかるの？」

「わかんないね。適当に言っただけ。たいていそんな顔をした人は、離れた誰かを想っていると感ただけ」

「あなた、何者？」

「道端で、詩を売る人」

次の休みの日、電車に乗った。定期の休みじゃ足りないだろうと思って、2日ほど有給を追加しておいた。だけど、そんなにいらないかもしれない。どの駅で乗ってきたのかわからないネコが座席にたゆっていて、それだけで私の心は満たされてしまったのだから。本当は逢いたい大切な人は、逢わなくてもずっと大切なことがわかった。それは十分すぎるほど幸せなのだと気がついた。

”書を捨てよ、旅に出よう”

開けていた窓から吹いてきた風に、その紙切れが飛ばされてしまった。せっかくだ、気ままな旅をすることにしよう。春の花が、窓の外に咲き続いていた。

岡本君との日々

## #18 紙飛行機

---

その日、いつも降りるバス停で降りなかった理由は単純だ。窓の外の月をずっと眺めていたら乗り過ごした、それだけのこと。家に帰っても誰が待っているわけじゃないし、遅くなったって構わない。そう思って、そのバスにしばらく揺られることにした。

体ごと窓にもたれかかって、月を見ていると、その距離がどんどん近くなっていくような気がした。いつかぼくは思ったっけ。月がどんどん近付いて、その光から逃れられなくなって、夜が来なくなる日が来るんじゃないかって。月明かりとバスの中の蛍光灯の光に包まれていると、いまがその日なのかもしれないという錯覚に陥った。今日はよく眠れそうだな。そう考えているとき、終点のバス停に着いた。そこはぼくの住む町が見下ろせる丘の上で、子供の時に遊んだ場所の風景に少し似ていた。

「なあ、昨日”キャプテン翼”見た？」

と、岡本君が言っていたことを思い出す。

「見たよ！ あれ、絶対ありえないよな？」

「ありえないよ、でもここ、ちょっと似てない？」

「ああ、似てる、似てる！ こんな感じの丘からあの下に見える学校に、ボールを蹴って飛ばして、それをキーパーがキャッチするんだぜ？ できるわけないよな？」

「無理だろ、やっぱり。でも、もしかして……」

「もしかして？ もしかしねーよ。でも、もしかして……」

バス停のベンチに座って思い出し笑いをしてしまう。もしかするわけないだろ、バカだな。月は相変わらず綺麗に光っている。上を向いてばかりじゃ、首が疲れてしまうな。そう思って、下を見てみると、そこに紙切れが落ちていた。

”書を捨てよ、旅に出よう”

一行だけそう書かれていた、ただの紙切れ。ぼくはそれを紙飛行機にした。あの下に見える学校まで届くかな。”もしかして……” それを実は本気で思っていたあのころのような気持ちで、ぼくは紙飛行機を飛ばしてみた。それは思いのほか、風に乗って、遠くまで飛んでいった。それを見逃さないようにしていたけど、闇の中に消えて、その行方を見失ってしまった。もしかしてそれは、岡本君の元まで飛んで行ったのかもしれない。ぼくはまた上を見上げて月を見た。その光は、ただ優しくかった。

## #19 別れの呪文

---

さっきから紙飛行機が空の中を旋回している。不思議なことにそれは地上に落ちる気配を見せない。

「あの紙飛行機、全然落ちないけど」

ぼくが指をさして言うと、岡本君もそれを見つめた。しばらく見とれて立ちつくしていると、大きな風が吹いてきて、その紙飛行機はさらに上昇した。

「すげー……」

ぼくらは同じ言葉を同じタイミングで吐き出し、顔を見合わせた。

「見た？」

「見た」

うなずいた岡本君の顔があまりにもマヌケで、ぼくは大笑いした。岡本君はそれにつられたように笑いだして、ふたりに緑の繁る野原に倒れこんだ。それからまだ落ちようとしめない紙飛行機をながめながら、深呼吸を繰り返した。

「笑い過ぎて死ぬかと思った」

岡本君はそうおどけてみせた。ぼくは小さく笑った後、話をそらした。

「つーかさあ、見つからないねえ、あれ。えっと、なんだっけ…… ミドリノ…… えっと、ミドリノ……」

「ミドリノホネノツラナッテ」

「あ、そうそう、ミドリノホネノ？」

「ツラナッテ」

ぼくらは“ミドリノホネノツラナッテ”という奇妙な名前の植物を探しに来たのだ。

「トウダイグサ科ペディランサス属、ティティマロイデス”ナナ”コンパクタ」

呪文を唱えるかのように岡本君が口走る。

「よく覚えたなよな？ 略して”ホイミー”じゃだめなの？」

と、ぼくはドラクエの呪文を唱えてみる。その呪文は体力を回復させるための呪文なのだ。

「見つけたら、まだ死なないで済むかな」

「バカ言うなよ！ 死ぬわけないじゃん！」

岡本君がもうすぐ死んでしまうことは、少し前に母さんから聞いた。ミドリノホネノツラナッテの正式名称くらい長い病名を聞かされたけれど、ぼくにはそれも悪い呪文のようにしか聞こえなかった。こんなにも生き生きしている岡本君が死ぬなんて、ぼくには想像することができない。きっと嘘なのだ。というか、ドッキリだ。きっとそうに決まっている。どこかにカメラがあって、ぼくの困惑する表情を映して楽しんでいるのだ。

「だよなー。死ぬわけないよなー」

「当たり前だ。生きて生きて生きまくるんだー！」

ぼくはわけもなく空に手を伸ばし、声をあげた。

「おれもだー！」

そう声をあげた、1週間後のこと。ぼくは岡本君とさよならをした。あの日の帰り道、ずっと飛んでた紙飛行機がいつの間にか落ちていて、それをぼくは拾った。そしてそれを、岡本君が眠る桶の中に入れた。

「トウダイグサ科ペディランサス属、ティティマロイデス”ナナ”コンパクタ」

やっと覚えた呪文を口にする。

「何か伝えたの？」

母さんがぼくに聞く。

「ミドリノホネノツラナッテ。回復の呪文なんだ」

もう回復しないことはわかったけれど、それがぼくのお別れの言葉だ。

## #20 私がまだ少女だったころ

---

“好きだって  
言ってなかったねと  
花は言う“

通りかかった花屋さんの窓に、そう書かれたポスターが貼ってあった。それを見たとき、小学生のころの記憶がフラッシュバックした。

「これ、読んで」

彼はそう言って、私に手紙を差し出し、逃げるように去っていった。私はそれがラブレターだと思い込み、急に体が熱くなっていくのを感じた。そして彼と同じように一目散にその場から離れた。家に帰り「ただいま」と言うと「おかえり」の声も確認せずに、自分の部屋に駆け込んだ。そして押し入れの中に忍び込み、少しでも明かりが入るようにして、彼からもらった手紙の封を切った。

手が震えて、うまく開かなかった。私は深呼吸をして、胸の鼓動を抑えた。心臓の位置って、ここなんだ。いまならきっとそれをつかめる気がする。そう思って膨らみはじめた胸をぎゅっとしてみると、ますます私はいけない気持ちになり、泣きそうになった。だめだ、この手紙を開けたら、私は爆発してしまう。そんな想いにすらなった私は、押し入れから出て、その手紙をそっと机の中にした。押し入れの外は明るくて、私の心を少し楽にさせた。

「贈り物ですか？」

花屋の店員に声をかけられて、記憶の中から私は戻った。

「ああ、そうですね…… あ、いや、その……」

私は言葉に詰まってしまう。

「よかったら花束作りますから、声かけてくださいね」

私の動揺とは関係なく店員は笑顔を見せる。私は無意識に次の言葉を告げる。

「えっと、あの…… ”ミドリノホネノツラナツテ”っていう…… 花じゃないんですけど、植物っていうか……」

店員は心地のいい間をあけてから、答えた。

「ああ、ありますよ。どうぞ、こちらです」

そう言われ、それがあある場所に誘導される。私はそこで、“ミドリノホネノツラナツテ”を初めて見た。

「へえ、こんな形してるんですね。というか、そのままの名前なんですね……」

ミドリノホネノツラナツテは、くねくねと曲がった茎から葉っぱが連なって生えていた。記憶の彼が言っていた言葉が聞こえる。

「おれらの命もつらなって一つなのかもしれないよな？」

それから私が彼からの手紙の封を開けたのは2年たったあと。そこには短い言葉が記されていた。

”そういえば、好きだって言ってなかった。元気でいろよ、いつまでもな”

もしもすぐにあの手紙を開けていたなら、私は彼に”好きだ”と伝えたのだらうと思う。そしてもっと、つらい想いをしていたのだらうと思う。私は彼が好きだった。

「また立ち寄りますね」

花屋の店員は「お待ちしてますね」と、笑顔で軽く首を揺らした。

花屋を出てから、夕飯の買い物をする。袋から飛び出たネギを見つめてふと思う。そしてそれを空につぶやいてみる。私はとても元気だよ、岡本君。

それぞれの事情

## #21 天井

仕事から帰ると、真っ先にベッドに倒れこんだ。直後に彼氏からのメールが来たけれど、それを返信する余裕はなく、後回しにすることにした。そうして、しばらく動かずにぼーっと天井を見ていた。天井の「井」の字の真ん中に点が入ると、「天井」になる。そんなことを考えていると、天井に天井のシルエットが浮かんできた。

「天井食べたいなあ……」

そうつぶやくと、グーッとお腹が鳴った。ああ、そういえば。昨日、母さんから届いたダンボールをまだ開けてなかった。そう思いだし、部屋の隅に置いておいたダンボールを開ける。そこに天井は入っていなかったけれど（入っていても困るけど）、春野菜やら栄養ドリンクやらが入っていて、これなら少しはお腹も満たされそうな気がした。お礼でもしておこうかな。2日も連絡を怠ればいつものように心配した母が電話をよこすだろうし、その前に今日は私から母に電話をすることにした。

「もしもし、私」

「ああ、届いた？」

待っていたかのように、母の声は高くなる。

「うん、届いた。ありがとう」

「よかった。あ、ねえねえ、いま思ったんだけど、“オレオレ詐欺”ってあるけど、“ワタシワタシ詐欺”ってないね」

楽しそうに母はそんなことを言った。母は思ったことをすぐ言ってしまう人なのだ。私はしょうがないなあと思って、「そうだね」と言っておいてあげた。

「少し疲れてるんじゃない？」

私の対応が悪かったのか、母はそう心配した。別にいつも通りの対応なのだけど、疲れていることは正解だ。けど素直じゃない私は「平気」とそっけなく返してしまう。

「それならいいけど。あ、そういえばねえ、コトカがお父さんにあげた“ミドリノナントカ”ってやつあるでしょう？」

「ミドリノホネノツラナッテ」

花屋さんで仕事をしている私は、父の誕生日にその多肉植物をあげた。そうだ今日、それを探しに来たお客さんがいた。それを見ている彼女の目は少し潤んでいる気がした。また来ると言っていたけれど、今度は買ってくれるかなあ。

「ああ、そうそうそれ、お父さん、相当気に入ってるみたい」

父は昔から少し変なものが好きだ。緑の葉っぱがくねくねとした茎からつらなって生えるその植物は、父好みだと私は直感でわかったのだ。

「そう、よかった。やっぱりお父さん、へんなもの好きなんだね」

「うん、しかも名前まで付けて呼んでるのよ、笑っちゃうわ」

母は、ふふふとこらえきれない声をもらした。

「なんて名前？」

「コトカ」

「私の名前じゃん」

「うん、淋しいんじゃないの。たまには帰って来なさいよ」

「帰っても、あんまり話さないじゃん、お父さん」

「口ベタだからねえ。でもほんとはものすごくうれしいの。わかるもん、私。可愛いよね」

母のおのろけを特に聞きたいとは思わないので、「そりゃあ、よかったねえ」と母の母のような気持ちで言っておいた。そうして電話を切って、彼氏にメールの返信をしようと指を動かした。その作成途中でメールをするのをやめた。私は彼に電話しようとボタンを押した。そしてこう言うのだ。天井作るから、一緒に食べよう、と。

## #22 桜と天井

「十五で姉やは嫁に行き”ってあるでしょ？」

「なにそれ？」

「”赤とんぼ”の歌詞」

「夕焼け小焼けの？」

「そう」

「そんな歌詞あるんだ」

「うん。それで十五で嫁になんか行きたくないなあって思ったんだ」

「ていうか、ウチら16じゃん」

「うん。だからさあ、16ってさあ、もう結婚してもいい年なんだなあと思って、なんか急にやるせなくなってきたっつーかさあ……」

「でも19くらいなら結婚したくね？」

「あ、わかるそれ！ 19はしたいかも」

夕焼けに照らされても緑だとわかる桜の木が、窓の外を流れていく。あんなにも咲き誇っていた桃の色はどこへ行ったのやら。19で結婚したい16の彼女らは、今はまだつぼみのようなものなのかもしれないと、俺はぼんやり考えた。そして家に帰ると、いつものように缶ビールを片手で開け、テレビを付けた。それから、一息ついてからおそらく仕事終わりの彼女にメールした。

”おつかれさま。あとで電話するよ”

すぐには返事はこない。それが彼女らしいこだとよくわかってきた俺は、気にせず、サイレントドラムを叩いてストレスを解消する。あんまり激しくすると苦情がくるから、やさしく丁寧に、たたく。それでもヘッドフォンからは心地好いドラム音が流れて気分が高揚する。一息ついて、ビールをまた口にすると、テレビに桜が映った。でもそれは桃の色をしていない。薄い緑の色をしている。それは「ギョイコウ」という種類の桜らしい。葉桜なわけじゃなく、花びらが緑で、そこに紅色が少し混ざっていたりする。それが妙に色っぽく思えてしまって、少し胸が高鳴った。花屋の彼女は知っているだろうか。無性にまたメールをしたくなってしまう。あるいはもう電話をしてしまおうか。いや、だめだ。待つことに決めているのだ。俺は無意識にサイレントドラムをドカドカ叩きだす。苦情も気にせずリズムを刻む。そうして最高潮になったとき、ベッドに倒れこんだ。そのとき携帯電話に彼女からの着信音が流れ出した。耐えた。おれ、耐えた。えらい。よくやった。自分で自分をほめながら、電話に出ると、彼女は開口一番こう言った。

「天井作るから、一緒に食べよう？」

俺は、ためらいもなく言葉を返す。

「天井か。じゃあ、エビ買っていくよ」

「春野菜はあるからね」

「おう、でもエビは入れたい」

「いいよ。でもエビは自分で揚げてね。じゃあ、待ってるよ」

彼女はまくしたてるように言って、電話を切った。

俺は家を出て自転車にまたがる。彼女の部屋へと続く道すがら、桜の木の葉っぱが風でざわざわと音を立てるのを聞いた。あれはギョイコウじゃない。ギョイコウならもっと色っぽい音を立てるはずだ。ああ、いますぐ彼女と結婚したい。ふと19でもないのに俺は、まるで幼い気持ちで、そんなことを本気で思った。自転車のスピードを上げると、そのまま空に飛んでいける気がした。

## #23 おみやげは蕎麦

隣の部屋からトントンとリズムを刻む音が聞こえてくる。なんだか心地いいそのリズムに揺られながら、ファッション雑誌をパラパラとめくっていると、ふいにドアチャイムが鳴った。ああ、そうだった。友達が遊びにくると、さっき電話があったんだ。ドアを開けると彼女は、両手に袋をぶら下げていた。洋服を買いあさって手がいっぱいになるような状態だけれど、彼女が持っているのは洋服ではなく、おそらくじゃがいもやらトウモロコシやらだ。袋からその頭が見え隠れしている。

「どうしたの、それ」

「ちょっと旅に出てて、昨日帰ってきたとこ。これ、おみやげ」

「旅に？ 誰かと？」

「ううん、一人で。あ、ごはん食べた？」

「まだ」

「ちょうどよかった、これ食べよう」

彼女はその袋の中から、バックに入った灰色の物体を私に差し出した。

「これってまさか、そば？」

「当たり～」

まるで板チョコのような形状になったそれを、蕎麦と呼ぶには無理があったけれど、

「私が打ったの。めちゃくちゃだけど、味は保障するから」

と、彼女は自信に満ちた声で言った。彼女を部屋に招き入れ、ちょうどお腹の空いていた私はすぐに、その蕎麦をゆであげた。

「ほんとおいしいから！」

においを嗅いでいる私に彼女は念を押すようにそう言った。まだ疑っている私だったけれど、恐る恐るその板チョコ状の蕎麦をつゆにつけて食べてみると、それはそれは、今まで食べたことのないほどの、おいしさだった。

「おいしい！」

「でしょ！」

彼女は満面の笑みを浮かべた。だけどどうして蕎麦など打ってきたのだろう。私は食べながら、彼女の旅の理由を尋ねた。

「失恋したし、仕事やめたし、いろいろあったからね」

淡々とそう答えた。

「そうなんだ。でも旅をしたくなるなんて、珍しいね」

彼女はあまり外に出たがるタイプではない、と私は思っていたのだ。

「猫は死に場所を探すっていうじゃない？ でも案外、人は丈夫だね」

同じように淡々と言葉にしたのは、今は死ぬ場所なんて探していないからだ、きっと。そうだったらいい。

「そうなんだ。よかったよ、生きてて」

「うん、私もよかった」

それ以上、私は聞こうとしなかったけれど、こうしてとんでもなくおいしい蕎麦を誰かと食べられるなら、生きていけるのかもしれないと、私は思った。それは私の勝手な想いだけど、私もそんなときがあったからなんとなくそれは正しい気がした。

「ねえ、さっきから隣でなんか音するけど？」

心地好いリズムは私の生活の一部になっている。

「ああ、うん。この時間いつもだから慣れたよ。なんかね、サイレントドラムっていうの叩いてるんだって。この前、聞いたんだけど」

「へえ、なんだか心地好い音だね」

「やっぱり？ 私もこの音聞いていると心地好いんだよね」

「隣の人って男の人？」

「うん、そうだよ」

「好きなんでしょ？」

彼女はいたずらに笑う。私は慌てて否定するけど、体温が少し高いことに気がついてしまう。ごまかすかのように不細工な蕎麦を食べていると、彼女はリズムに乗って歌いだした。なぜか「思い出の九十九里浜」だ。

「なんで、それ？」

私は不思議に思って聞いてみるけど、彼女は首をかき上げて笑った。でも、その歌に合ったリズムが聞こえるので、私も一緒に口ずさんだ。ふたりでハモると、待っていたように笑い合った。私はそのとき全身から彼女が生きていてよかったという思いがあふれた。

「おいしいね、ほんと」

「うん、ほんと」

蕎麦が少ししょっぱくなったのがわかったけれど、不思議とさっきよりもおいしくなった気がした。

## #24 もう片方

”あなたを失いたくないから、付き合うことはできない”

昨日読んだ小説の中に、そんなセリフがあった。それは過去に言われたことがあるセリフだと思ったのと同時に、付き合うこともなく失った記憶も蘇った。それからずっと、片方がない感じのまま生きている。どうせ失うなら付き合いはよかった。強引にでもそうして、青春の記憶にでもとどめたほうがよかった。工作中、そんな邪念に襲われてしまう。「いかんいかん」と首を振り、とりあえず一呼吸おこうと、一服することにした。

喫煙室に行くと、いつもの彼女がいた。仕事の上ではあまり関わりのない彼女だけれど、こうしてタバコを吸いに来るタイミングは同じだった。タバコを吸ってるときの表情は、少し淋しいなと彼女を見ておれは思う。彼女にもおれがそんな表情に見えているのかもしれない。だからって何も始まらない。それがありふれた日常というものだ。けど今日は少しだけ日常を外れた。

「あれ？」

タバコに火を点けようとしたけれど、ライターのおイルが切れている。

「貸しましょうか？」

彼女にそう言われ、おれは「悪いね」と手を顔の前に立てた。そして、ライターを受け取ろうかと思っていたところ、彼女はおれがくわえたタバコの前に火を立てた。少しふいをつかれながらも、タバコを火に近づけ、すーっと息を吸い込んだ。

「キャバ嬢みたいだな」

と冗談っぽく口にしてみたあと、こういう発言はセクハラなのかと一瞬考えた。

「こういうの、一度やってみたかったですよね」

どうやらセクハラではないようで、おれはタバコとともに一息ついた。

「そうなんだ。でもおれもあんまりそうされるの慣れてないから、なんだかぎこちなかったな、悪い」

キャバ嬢にそうされるのも慣れないのだ。

「私が慣れてないからぎこちないのかと思ってました」

と彼女は小さく笑った。

「なんだ、やっぱりぎこちないと思ってたんだ？」

彼女は屈託なく、「はい」とうなずいた。たとえばこんな会話をきっかけに、彼女と仲良くなるとしても、”あなたを失いたくないから、付き合うことはできない”とおれは言われることだろう。そして、いつか結局、失うことになるのだ。そんなことを思ったのは、彼女がどこか”付き合うこともなく失った彼女”に似ているからなのかもしれない。

「素直だね」

「はい。傷つきました？」

「いや、防御線は太いから平気」

かっこ悪すぎる答えだ。いつから防御線ばかり張るようになってしまったのか。

「蕎麦、好きですか？」

彼女はまるで関係のないことを聞いた。

「蕎麦？ ああ、好きだけど……」

「じゃあ、あした持って来ますから、同じ時間にここで」

「ここに持ってくるの？」

「はい。板チョコみたいな蕎麦ですけど」

「そんな蕎麦、見たことないな」

「でも、すごくおいしいんですよ。旅先で打った蕎麦なんですけど」

「君は蕎麦打ち職人だったのか」

「そんな大それてません」

「そっか。でも、ありがとう」

「その蕎麦食べたら、すべて解決です」

ちょうどタバコを吸い終えた彼女は、喫煙室を出て行った。

そんな魔法の蕎麦があるのかと思いながら、それでもおれの気持ちのもやもやはもう解決したような気がした。これからまたおれは傷ついたり、失ったりを繰り返すのかもしれない。それでもなお、探し続けようと思う。おれの、もう片方を。

## #25 ハナ

彼女が言っていた通りの板チョコの形状だ。見た目だけではそれを蕎麦と呼ぶには無理があるが、それはそれで面白とおれは思う。とにかく茹でてみることにするか。お湯を沸かして、それをどぼっと入れる。蕎麦らしいにおいが漂ってきたとき、携帯に電話がかかってきた。母親からだ。おれは蕎麦のゆで加減を見ながら、その電話に出た。

「もしもし」

「あ、もしもし。かあさんだけど」

「ああ」

「いま大丈夫？」

「ああ、平気。蕎麦茹でてるけど」

「蕎麦？ うちも蕎麦にしようかしら」

話が逸れそうだったので、蕎麦をかき混ぜながら、おれは素早く話を元に戻した。

「で、なんかあった？」

「ああ、そうそう、ハナのことだね」

”ハナ”とは、実家で飼っている犬のことだ。おれが中学生のときから飼っているから、もう十五年近く生きている。ずいぶんと老犬になったものだ。

「ああ、ハナ元気？」

「散歩のときはすごく元気だけど。それ以外の時はグラーっとしてるね。もう年だからねえ」

「そう。まあ、ほんとに長生きしてるからね」

「最近、夜鳴きするのよ。決まった時間に。なんでだろうと思って」

「なんでだろうって言われてもなあ…… お腹すいてるとか？」

「エサは少し残してるくらいよ」

「そう。じゃあ、淋しいんじゃないか？ 老犬になると、そういうのあるって聞いたことがある」

「いつも決まって十二時半になると鳴き出すのよ。その時間に何かあるのかねえ」

夜中の十二時半。それは中学生のおれが、親に気がつかれないように泣いていた時刻だ。何があったわけじゃないけれど、唐突に不安がやってきて、泣きたくなるのだ。そして、気がつかれないようにハナの元に行き、その隣でいつもそっと泣いていたのだ。そうしているとハナはおれに体を寄せてきて、その体重を全部預けてくる。おれはその重さを感じると、なぜだか安心していつも泣きやむことができた。今度は老犬になったハナが鳴いているのか。おれがハナに寄り添ってあげれば、鳴きやむかもしれない。

「そう。やっぱり淋しいんだよ。そばにいたら安心して鳴きやむよ、きっと」

「そうね。わかった。そうしてみる」

「ああ、そうしてみて。蕎麦できそうだから、切るよ」

おれはそう言って電話を切った。

ちょうどいい頃合いになった蕎麦をざるに上げ、水切りをし、器に移して盛り付ける。”おいしいざるそばのつゆ”を冷蔵庫から取り出し、ふーっと息をついてテーブルの前に座った。もしかしておれの淋しさをハナは感じとっているのだろうか。それを癒せない淋しさを抱えているのだろうか。それともやっぱりただ、ごはんが食べただけだろうか。両方の気持ちを持ったまま、おれは蕎麦を口にした。それはその不細工な形から想像できないほど、おいしかった。あまりおいしいので、これをくれた彼女にお礼を言いたくなかったけれど、まだ連絡先はおろか、名前さえも確認していない。おれは遠吠えしたい気分だ。まあ、いい。あしたまた、喫煙室でお礼を言おう。そして、週末には、ハナに逢いに行こう。

## #26 わたげ

「あの蕎麦ほんとおいしかったよ。ありがとう」

喫煙室で彼女にお礼を言うと、彼女は「いいえ…」と笑顔で軽く首を縦に揺らした。おれもそれに合わせて小さく笑ってみる。

「ああ、そういえば私たち、名前も聞いてなかったですね」

彼女からそう切り出され、おれは少し慌てた。そのそぶりをあまり見せないように、「そうだったね」と冷静な声で言った。

「私は、太田花っています」

また彼女に先を越された。そして「ハナ」という名前に反応してしまう。

「ハナ？」

「花です。草花の"花"です」

「そう、そうか……」

「なにかあるんですか？」

うちの犬が「ハナ」って言って…… とは、なんとなく言いにくかった。

昔、「もも」という名前の子と付き合っていたときのことだ。彼女と話しているとき、何かの拍子で動物の話になった。確かおれは「昨日テレビで見たんだけど」と切り出したように思う。それは動物番組だった。チンパンジーが映って、ナレーションが「こちらがチンパンジーの＃ももちゃん＃」と紹介していた。そんな話をしたのだ。すると彼女は不機嫌になって「そのチンパンジーを見て私を思い出したってわけ？」と、おれに問いただした。「いや、ももって名前でもものこと思い出したんだよ」と正論を言っても聞く耳を持たず、その日彼女の機嫌をとるのには苦勞した。犬とチンパンジーは違うけれど、そんなことを思い出したゆえに、なんだかそれを口にするのをためらった。

「いや、いい名前だなと思って」

やっぱりハナのことは言うのはやめて、当たり障りのないことを言葉にした。

「そうですか？ 私は微妙なんですよね。なんか名前負けしてるような気もするし……」

彼女は不満げにそう言った。

「それならおれのほうが完全に名前負けだね。ヒデオっていうんだけど」

「ヒデオ？ どうして負けなんですか？」

「野茂と同じヒデオだよ？ 英雄って書いてヒデオ。つまりヒーローってこと。あー、ほんとにヒーローなのは野茂だけだ。おれは野茂じゃなくて、野田だもんなあ……」

ため息と一緒に煙を吐き出す。彼女は笑っている。

「野田さんて、面白いですね」

「おもしろくなくていいから、ヒーローになりたいよ」

そう言っておれも笑ってみる。

「いま、かなりヒーローっぽいですよ」

それはお世辞だとわかったおれは、そのお礼を彼女にしてみる。

「君もいま、花っぽいよ」

「どんな花ですか？」

「うーん……」

「適当に言ったんですね？」

彼女の言い方は柔らかく、おれの言葉に不満だったわけではないと思う。けれど、おれは何か言葉にしてみたいと考え込んだ。窓の外に目をやってみる。ちょうどたんぼぼの綿毛が張り付いていて、おれはそれを見ながら言ってみた。

「たんぼぼのわたげ」

「え？」

「風に舞ってる、たんぼぼのわたげだな」

彼女はふふふと小さな声で笑った。

「それ、まだ花じゃないでしょ」

そう聞こえて、「そうか……」とおれは腕組をする。彼女は「では、また」そう言って、喫煙室を出た。

「ああ、また」

窓の外、わたげが舞っている。春だというのに、それはまるで雪のようだ。あたたかい、雪のようだ。

## #27 ボートレース

週末、ハナ（実家で飼っている犬）に会いに行く予定は、突然の訪問者により取り消された。

「悪いけど、いつものやつよろしく」

「悪いけど、これやっといってくれる？」と、仕事を頼まれるときのあの感じの口ぶりでカジくんは言う。あの「悪いけど」って枕詞のよのなんだよなあ。悪気があるのかないのか、「枕詞」では判断できない。けれどカジくんにかかると、それは魔法にすらなるのだ。

「また奥さんとケンカしたわけだ」

いつもと同じように聞いてみると、彼はわざとらしく、

「うう～そうなんだよ～。頼むよ～、ヒロ～」

とバカな声を出した。彼はおれを「ヒロ」と呼ぶ。「英雄」というおれの名を中学生のときの彼は「ヒーロー」と呼び、それからそれがだんだんめんどくさくなったのか、高校生くらいになると、いつのまにか省略されて「ヒロ」になった。おれは彼のことをずっと名字で「カジくん」と呼び続けている。

「まあ、いいけどさあ……」

「ありがとう！ 心の友よ！」

「ジャイアンか、おまえは」

そんなことを言って、おれは「いつものやつ」のために準備をした。奥さんとケンカをすると、カジくんはおれのところにやってきて、「勝負しよう」と言うのだ。それは近くにある公園の池で、カップルだらけの優雅な時間の中、おれだけが全速力でボートレースをする、というもの。中学生のとき、初めての失恋したカジくんをなんとかなぐさめようとしてはじまったボートレース。それはいつのまにかお互いのストレス解消ゲームになっていった。中学で出会い、高校、大学と、特に約束をしたわけでもないのに、なぜか同じ学校を選び、そして仕事は違うけれど、同じ街で働いている。生まれた街じゃないその街が気に入った理由は、池とボートがあったから。きっとカジくんも同じだったのだろう。いつしか彼は結婚をし、おれはまだ独身でいる。

「つーか、まだ彼女いなかった？」

痛いことを聞いてくる。

「付き合わずに別れた彼女」なら最近までいたけれど、そんなことを言っても仕方がないので、「相変わらずいないけど」と答えた。

「そうかあ。でも、ワールドカップが始まるから、そろそろ彼女できるな、きっと」

とカジくんは笑った。そうだ。不思議とぼくにはサッカーのワールドカップがある年になると、彼女ができるのだった。とはいえ、次のワールドカップまで付き合いが続いたことはないのだけど。

「今回のワールドカップには期待してないから、今年はできないんじゃないかと思うけどな」

ぼくの恋愛は日本代表の成果とリンクするような恋愛なのだ。日本代表が惨敗したときの恋愛は長続きせず、躍進したときは比較的順調な交際が続いた。それでも次の大会の時はもう、別れてしまうのだけれど。だから、おれにとってワールドカップは人生がかかっていると言っても過言ではないのだ。過言かもしれないが、あれこれくだらない話をしながら池に着くと、おれらを見た管理人があきれたように「ああ、またかい」とにやけた。

「いつものとこで頼むよ、事故を起こされたらたまったもんじゃない」

いつのまにかそのレース専用の区間までできていて、大人のおれらはおとなしくそれに従った。そしてボートに乗り込む。オールを手にして態勢を整える。

「準備はいいかい？」

そう言ったのは管理人だ。彼もどうやら大人げない。

「しょいっ！」

3、2、1、ゴー！

オールを漕ぎだす。カジくんのボートは徐々にスピードがあがり、おれは少し遅れをとる。

「別れちゃえよ！」

負けず嫌いなおれはカジくんに動揺を与えようと試みる。

「別れねー！ 大好きだー！」

「くそっ！ しあわせなやつめっー！」

明日の筋肉痛など、今は関係ない。たとえワールドカップがどうであろうと、ただおれたちは、今と言う「しあわせ」を漕ぎ続けるのだ。ボートは風のように、おれとカジくんを包んでいった。

## #28 さよなら、ありがとう

---

「春はサヨナラも言わないうちに行っちゃった」

札幌に住む友達からメールが届いた。どうやら彼女のもとにも夏が来たようだ。私はケンカして出て行った夫の帰りを待っている。彼は今日もまたきっと、帰ってきて言うのだろう。「ああ、ヒロとボート漕いでた」って。ケンカするたび、そうする彼の行動が、なんだかうらやましいと最近の私は思っている。そして彼より年上の私は大人げなく「くやしい」と思いながら、「そっか、楽しかった？」と、大人の対応をしてしまうのだ。大人なのか、子供なのかわからなくなるとき、私はどうしようもなく彼が好きなのだということを思い知る。彼がいつものようにボートを漕ぐように、私も彼女にメールする。

「夏も秋もサヨナラをしないうちに行ってしまうのかな」

”送信完了”の文字の十秒後くらいに、彼女から電話がかかってくる。彼女に電話代がかかってしまうのは悪いので、私はそれには出ずに、切れたところでかけなおす。私が甘えるのだ、そうしないとなんだか申し訳ない。かけなおした電話に彼女が出る。

「指定割にしてるから、遠慮なく出ればいいのに」

それは私も同じだ。

「でも、親しき仲にも礼儀ありっていうか」

「律義なところは、相変わらずだね」

と、彼女は笑う。

「今年は春、来なかったの？」

「うん、今日いきなり夏になったって感じ。いい天気だよ」

「そっか」

「夏はこっちに帰ってこないの？」

「夏よりも梅雨に帰りたい。そっちには梅雨ないし」

「夏より嫌なんだ？」

「うん、梅雨もサヨナラしないで行ってしまえばいいのに」

私は甘え切って、ため息が混じる。

「あ」

彼女は何かを発見したように声を出した。

「ん？」

「つぐみだ」

「つぐみ？」

「鳥。つぐみって、夏になると帰ってくるんだよ」

「へえ」

私は無意識な相槌を打っている。

「どうでもいいって感じ？」

ばれた。

「あ、ごめん」

彼女は優しく笑う。

「あ、行っちゃった、つぐみ」

「サヨナラも言わずに？」

「言えばよかったね、サヨナラ」

私はそのとき、急に胸が苦しくなり、彼に逢いたくなかった。

「大人になると”サヨナラ”って、あんまり言葉にしないよね」

「うん、”サヨナラホームラン”くらしかね」

彼女がまじめにそう言って、私はツボに入ったのか、ケラケラと笑った。彼女はそれを面白がった。楽しくて、せつなくて、ごちゃ混ぜになった気持ちが、心地よく体を包み込んでいった。

「ありがとう」

彼女にお礼をする。

「うん。やっぱり”サヨナラ”より”ありがとう”のほうがいいね」

彼女はそのあとの言葉を言わなかったけれど、“だから彼にも「ありがとう」と伝えないと”と、そんな言葉が聞こえた気がした。彼が帰ってきますように。いつものように、「ああ、ヒロとボート漕いでた」と言いますように。そして私、笑って言うんだ。「おかえり、ありがとう。愛してるよ」って。「え？」っていう彼の頭を撫でながら。

たてうちくんとめぐる憧憬

## #29 風になびく前髪

---

### SIDE-sae

「電話、終わった？」

電話を切って、ふとその声に耳を傾けると、たてうちくんが待ち合わせの場所に10分遅れで来ていた。

「うん、終わった」

「アイスでも食べにいこうか、暑いし」

「そうだね、暑いしね」

「ちょっと遠いところだけど」

「疲れたら運転代わるよ」

「よろしく」

そうしていつものように彼の車に乗り込んだ。いつもと違うのは、たてうちくんの左手が私の右手を探さないこと。別れたのだから、それが普通だ。でもこうして会ったりするのは普通かどうかわからない。付き合う前の普通はこうだったはずだ。その「普通」のほうが私にとっては付き合いやすい。それは虫がよすぎるかもしれないと、ときどきは思う。

「さっきの電話、彼氏？」

ハンドルを握りながら、たてうちくんが聞く。私は少し、イラっとする。

「違うけど」

気持ちを抑えて言ってみるけど、たぶんイラついているのはバレている。これは付き合う前の「普通」ではない。

「そう」

その、「そう」の言い方が私の癪に障る。

「いいしょ、誰でも。たとえ彼氏ができて、たてうちくんには言いたくない」

そんなふうに想いのままに言ってしまう。そういう気持ちを彼の前ではコントロールできない。だから、私は彼と付き合うのがつらかったのだ。

「まあ、そんなもんかもね」

たてうちくんの言い方は「天気がいいね」というような感じだ。その感じで言われるとき、私はいつも反省する。たてうちくんと付き合ってから、私はイラついて、反省してばかりだ。私は少し間をおいて、話を変えた。

「あ、あのね、さっきつぐみ見かけたよ」

「そう。帰ってきたんだ。そりゃ、暑いわけだね」

つぐみが帰ってくると夏になる。それはたてうちくんが私に教えてくれたことだ。たてうちくんはパワーウィンドウを全開にした。風が入ってきて暑さが和らぐけれど、前髪が風になびいてふわっとしてしまふ。私はそれをてのひらで押さえる。

「なんで押さえてるの？」

「前髪が崩れるから」

また少しイラっとしてしまふ。たてうちくんは窓を半分くらいまで戻した。こういう気遣いを彼は結構してくれる。でも、私はそういうのに、あまり気が付いていないような気がする。また、反省した。窓の外を眺めながら、少し感傷的な気分になる。

「あのさ」

たてうちくんが言う。

「ん？」

「彩映さんは、俺といると怒ってばかりだね。無理して会うこともないんじゃない？」

それもまた「天気がいいね」の言い方だ。たてうちくんと会うことに、私は無理なんかしていない。でも、たぶん期待している。それは、彼にも、私自身にも。でも、そう言われ、ああ、もう初めのころの「普通」を感じるができないのかなと、なんだかすごく淋しい思いがした。

「たてうちくんはどうなの」

うまく言葉にできない私は、そうやって逃げた。なんか私はずるいと思う。

「きっとさあ、まだ俺が彩映さんに恋愛感情があると思っているから、イラつくんでしょ」

「たしかにイラついてるけど、そういう理由かはよくわからないな……」

私は正直にそう答えた。そしてそのあと、私は本当に自然に言葉が出た。それはまるで「天気がいいね」のように。「私、たてうちくんのこと、あんまり好きじゃない。でも、いなくなったら困るって思う。いたらいいと思う。会ったりしなくても、いなくならないでほしいって感じがするさ。なんか、すごく自分勝手だけど」

ああ、そうか。私はたてうちくんが好きじゃないってことを、きちんと言葉にしてこなかったのだ。それは気遣いだと思っていたけど、ただ私が傷つきたくないだけだったのだ。きっと。ごめんなさい、でも、なんというか……

「ありがとう」

たてうちくんは、そう言った。聞き間違いかと思って、「え？」と聞き返した。

「ありがとうって言ったの。たぶん、俺もそんな感じ」

「そうなんだ……」

またうまく言葉にできなくなった。それでも、それはいいことなのだと思うことができた。私たちは、何度も新しい関係を作り上げるのだ、きっと。

「何アイス食うの？」

「チョコ。たてうちくんは？」

「ミルク。でもチーズもいいしなあ……」

「そういうはっきりしないところ、嫌」

「自分のようだから？」

「そうかも」

私はもう、風でなびいた前髪を押さえたりはしなかった。

## #30 キャバクラの思い出

### SIDE-tateuchi

「最後はキャバクラで締めるか」

それはまだぼくが東京で働いていた時のこと。氷をかきまぜている彼女の手を見ながら、ぼくはぼんやりしていた。仕事仲間の送別会だった。四次会か五次会かわからないけれど、とにかく飲み屋をはしごした。そして男だけになった最後は、そこに行き着いたのだ。確か前にも違う人の送別会でそうだった。そのときはこれ以上に酔っていて、家に帰ってからはトイレで寝てしまったのを思い出した。それであまり乗り気にはなれなかったけれど、主役の先輩の空気に、呑まれた酒にやられ、結局は付いていくことにしたのだ。

「どうぞ」

隣に座ったキャバ嬢の作ったお酒を手にとる。「ミキ」という源氏名の彼女は当時二十二歳だったぼくと同じくらいの歳に見えた。

「ありがとう」

正直、もうかなり酔っていたけれど、それでもまたお酒を口にした。

「だいぶ飲んだの？」

そう聞かれて、カッコつけるように、

「そうでもないんだけどね、追加してもいいよ」

と尝试してみた。

「おまえ、カッコつけたろ～。さっきまで、もう飲めませ～んって泣いてたくせに～」

と、先輩がチャチャを入れてきゃははと笑った。

「泣いてたの？」

隣のキャバ嬢が優しい口調で聞く。

「泣かないよ、あのひと、大袈裟なんだよ」

酔ってるせいだからか、女の子の前だからか強気だった。先輩は馬鹿みたいにきゃははとまた笑った。

「ミキちゃんは東京の人？」

「ううん、北海道」

「ほんと？ 俺も札幌だよ」

「あたしは小樽だよ」

「へえ、じゃあ近いね。なんかうれしいなあ」

と、ぼくのテンションが少し上がっていると、

「俺だってカナちゃんと新潟と長野で中部地方出身同盟組んだもんね」と、先輩がわけのわからない対抗心を燃やしてきた。「そうっすか、よかったすね」と、ぼくは言ってやった。きゃははと笑ったあと、先輩はカナちゃんを一生懸命口説きはじめた。ぼくはまた氷をグラスに入れるミキちゃんの手元をぼんやりとみた。そういえば、中学生のとき小樽に転校した同級生がいたなあ。

「たてうちくん知ってる？ つぐみが帰ってくるとね、夏が来るんだよ」

その彼女の言葉が蘇る。

「じゃあまた帰っておいでよ。花火したり祭りに行ったり、夏はやることたくさんあるからさ」

ぼくは彼女と親しかったわけじゃないが、転校する前日の帰り道で、たまたま彼女とそんな話をした。そして「手紙を書くよ」と約束をしたのだ。ほんとうになんとかそう言って、約束通り何通かの手紙のやりとりを繰り返した。そして何ヶ月がたったころ、彼女からの手紙はぱったりと来なくなった。ぼくは最初のうちは淋しいと思いをしていたけれど、少ししてぼくに恋人ができると、彼女のことはすっかり忘れてしまった。きっと彼女も、ぼくのように恋人でもできたのだろう。そんなふうにときどきは思うようにした。ただ、それだけの思い出だ。それだけの思い出が蘇って、胸がぎゅっと痛くなった。もしかして、もしかしてだけど、彼女は死んでしまったとかいうことはないよな。ぼくは今になってそんなことを考え出して、どうしようもない痛みを抱えてしまった。それからミキちゃんが氷をグラスに入れ

るたび、その痛みは増していった。話す言葉も、次第に少なくなってしまった。

「もうお帰りのようですよ」

ミキちゃんに声をかけられ「ああ……」と頷いた。まだ立ち上がれない。ぼくはぼんやりミキちゃんの顔を見つめてみる。ミキちゃんはそれに返すように、ぼくの目をじっと見た。ぼくはその中に、中学生の彼女の姿を見ていた。ぼーっとするぼくにミキちゃんはキスをした。

「置いていかれちゃいますよ」

そう言ってぼくの目尻を指でなぞった。

「ああ、うん。そうだね」

店を出ると、外は夜が明けていた。その中で先輩は「みんな元気でな、また飲もうな」と挨拶をした。ぼくは先輩と握手を交わし、「がんばってください」と声をかけた。そうやってぼくらは解散した。

帰り道、あのキスは何かと考えていた。とてつもなく優しいキスだったなあと朝やけを見ながら思った。ああ、それにしても飲み過ぎた。今回もまたやっぱりトイレで寝てしまいそうだ。夢うつつの中、ぼくはただ前を歩いた。

## #31 さよならのキス

「まあ、しばらくゆっくりしたらいいさ」

離婚してへとへとになったあたしを、パパは温かく迎え入れてくれた。ママは私が中学生のころ亡くなった。それから東京の大学に入るために上京するまで、あたしはパパと、ふたりで暮らしてきた。上京してからは、学費を稼ぐために、パパに内緒で水商売のアルバイトをした。お酒を飲んで、男の人と話す。本当にそれだけで、危険な目に遭うことはなかったのだけど、どこか後ろめたい気持ちがあって、パパにそれを言うことはなかった。

「うん、そうする。ほんとにすごく疲れた」

「今日は何がいい？ クリームシチューにしようか？」

小さいころ、あたしが何かで泣いたとき、ママはクリームチューを作ってくれた。それを食べるとあたしは泣きやんだのだ。ママがいなくなっからは、それをおパパが受け継いだ。あたしはもう大人になったので、クリームシチューでなくても泣きやむことはできる。けれど、パパの気遣いに甘えることにした。

「うん、ありがとう。ちょっと部屋で休むね」

あたしは昔使っていた自分の部屋に入った。東京にいても1年に何度かはこの部屋に帰ってきている。パパはあたしのいない間もきちんと掃除しているから、帰るたびにきれいになっている。いつもの配置、いつもの西日。それはあたしをひどく安心させた。そして、帰ってくるたび確かめるようにする行為を、今日もまたおもむろに繰り返した。

”拝啓、西脇ユキ様”

その手紙を西日が差し込む部屋に広げると、二十二才のあたしと彼も、いっしょに浮かんできた。

「ミキちゃんは東京の人？」

「ううん、北海道」

「ほんと？ 俺も札幌だよ」

「あたしは小樽だよ」

「へえ、じゃあ近いね。なんかうれしいなあ」

彼は私の源氏名を呼んだ。だから私は「ミキ」のまま彼に答えた。ほんとは札幌にいて、中学生のころに小樽に引っ越した。そう言おうとも思ったけれど、あたしは「ミキ」なのだ、そう思ってやめた。あたしは彼が「たてうちくん」だとすぐにわかった。笑うとできる片えくぼと、そのときそれをなでる仕種が、中学生の時と変わらなかったから。彼の名前と昔話をおもむろに引き出して聞くと、やっぱり「たてうちくん」だということを確認した。小樽に引っ越した中学生のあたしは、たてうちくんと文通をした。ちょうどママが死んでしまって、あたしが途方にくれているのを、たてうちくんは一生懸命手紙で勇気づけてくれた。その手紙の一字一文字を、いつしかあたしは愛しく思うようになって、それが恋だったことを知った。たてうちくんと東京で逢うなんて。あたしはすごくドキドキしてしまって、氷をかき混ぜる動作を必要以上に繰り返した。あたしが「ミキ」ではなく「ユキ」だと知ったら、彼は何を思うのだろう。だけど、彼はあたしを「ユキ」だとは思っていない。それが少し悲しい。彼がいっしょに来ていた仕事仲間と店と出るとき、あたしは彼にキスをした。

「置いていかれちゃいますよ」

「ああ、うん。そうだね」

あのね、あたしが手紙を出さなくなったのは、たてうちくんのせいなんだよ。

”彼女ができたよ。西脇さんも早く彼氏ができるといいね”

それを読んでしまったからなんだ。だから、これはさよならのキス。あたしの淡い幼い恋と、さよならするよ。たてうちくんとはもう会わない。あたしは次の日お店をやめて、住んでいた部屋も引っ越した。引っ越した街で、やがて結婚することになる彼と出会った。そのときのあたしは、とても幸せだと思っていたけれど、結局、別れることになってしまった。

「ユキ、買い物、行かないかい？ いや、無理だったらいいいんだ」

ドアをノックしたあと、パパの声が聞こえてきた。あたしはたてうちくんの手紙を引き出しに戻して、ドアを開けた。

「もう行ってるかと思ったよ」

「ああ、行こうかと思ったんだけど、せっかくだし一緒に行けたらと思って」

「うん」

そう、うなずいてから、あたしはベッドにもたれて、言葉が続けた。

「パパ、再婚しないの？」

パパは腕組をして少し考え、それから言った。

「まだ、ママのことが好きだから、そんな気になれないんだよ」

それはなんとなくあたしと同じだと思い、なんだかおかしくなった。

「それならどっちが先に再婚するか、勝負しない？」

あたしはニヤッととなつて、そんなことを言っていた。パパは、少し驚いた顔をして、やがて少しずつ優しい笑顔を浮かべた。

「ああ、いいよ。パパ、負けないから」

西日が染める部屋のオレンジが、心の中にまで、あたたかく差し込んでいた。

## #32 アテレコ

「そのミキちゃんがさあ、手紙の彼女だったりしてね」

アイス屋さんに向かう車の中で、彩映さんは言った。どんな流れでそうなったかわからないけれど、「キャバクラって行ったことある？」と彼女が聞くものだから、ぼくは少し思いつきをしたのだ。中学生のころ、転校生と手紙のやり取りをしていた。ミキちゃんというキャバ嬢を見ていたらそれを思い出した。それだけの話で彼女の想像は一気に飛躍した。

「そんなのあるわけないしょ。札幌じゃないよ、東京での話だよ？」

ぼくはそう否定し、それを鼻で笑った。でも彩映さんは「なんとなくそんな気がする」と腕組をして一人うなずいていた。根拠のないそれを「女の勘」と呼ぶのだそうだ。「まあ、それがほんとなら、すごいことだけど」ぼくはそんなふうになって、アクセルを少し強く踏み込んだ。

やがてアイス屋さんにとどり着くと、案の定、ぼくはミルクかチーズかで迷った。彩映さんは、その素振を見かねたのか、「チーズふたつで」と勝手に注文をした。

「あれ？チョコじゃないの？」

車の中で彼女はチョコを食べると言っていたのだ。

「やめた。なんかチーズがおいしそうに見えたから」

「ふーん。相変わらず、よくわからないね」

ぼくは怒るでもなく、そんなふうにつぶやいた。彩映さんは、恋人ではない。少し前は恋人だったけれど。恋人じゃないぼくらは、友達でもない。それでもこうして会う理由、それはさっき彼女が言葉にしてくれた。

「私、たてうちくんのこと、あんまり好きじゃない。でも、いなくなったら困るって思う。いたらいいと思う。会ったりしなくても、いなくならないでほしいって感じがするさ。なんか、すごく自分勝手だけど」

それはなんとも絶妙な答えて、思わずぼくは「ありがとう」と返したのだ。彩映さんは戸惑っていたけれど、それが正しい関係だということにいずれ気が付くだろう。ぼくはそんなことを確信をもって思った。

彩映さんが勝手に注文したチーズアイスを受け取ると、ぼくらはそれを持って外に出た。外にはベンチが等間隔で置いてあり、そこにふたりで腰かけた。風が気持ちよく吹いている。車の中では気にしてた前髪の崩れを、彼女はもう気にすることなく、「おいしい」と口にしながら、もくもくとアイスを食べた。ぼくはその横顔をぼんやり見ながら、こういう感じが好きだったんだよなあと思いだしたりした。

「あ」

と、彼女が声を出す。

「ん」

と、ぼくは返す。

「あの子たち、いい雰囲気だね」

彩映さんの視線の先には大きな木があり、その下に制服姿の男女がシルエットで見えた。二人は対面になっていて、男の子が何かを言おうとしている。女の子は下を向いている。

「あ、もしかして、告白するんじゃない？」

甘酸っぱい青春のそれみたいな風景に、ぼくはそんなことを小声で言葉にしてみた。

「うん、そうかもね」

つられた彩映さんも小声だ。

「あの…… あのさ…… 俺…… とか言ってるのかな？」

ぼくは彼の仕種にアテレコしてみる。

「え…… うん…… なに……？ って答えてるのかな？」

彩映さんもその女の子の声をアテレコした。ぼくらはふざけてそれを続ける。

「おれ、あの…… いや…… その……」

「うん……」

「っていうか、最近どう？」

「どうって…… 普通だよ」

「普通か…… うん、やっぱ普通がいちばんだよな……」

「うん…… って、話ってそれだけ？」

「いや、そうじゃなくて……」

「はっきりしてよ」

「うん、だから…… その……」

「ねえ、やっぱりそういうはっきりしないところ、私、キライ」

「そうか、それは仕方ないね」

「思うんだけどね、たてうちくんはもうちょっと男っぽくなったほうがいいよ」

「そうか、そうかもね」

いつのまにか、アテレコじゃなくなっている。ぼくらは少し、沈黙した。その沈黙の間にシルエットの彼らは、手をつないだ。その光景はあまりに美しく、写真におさめておきたいと思うほどだった。

「告白、成功だね」

彩映さんがそう口にして、沈黙が破られた。

「初々しいね」

「やっぱり、ミキちゃんは手紙の彼女だよ」

思い出したように口にする。

「こだわってるね、それ」

「ていうか、そうだったらいいなあと思ったさ」

「やっぱりよくわからない、彩映さんは」

シルエットのふたりが手をつなぎながら、ぼくらのそばを通過する。アテレコしてたのがバレてないかと、少し冷や冷やして、彩映さんと目を合わせる。何事もなくふたりは通り過ぎて、ぼくらはふーっと息をつく。それから小さく笑い合った。たぶん、こういうのが、正しいことなのだ。そう思いながら、柔らかい風に吹かれた。

## #33 恋

水を張った田んぼの中に、アメンボがいる。十一才の俺はそれをぼんやりと見ていた。みんなは学校に行っている時間だ。俺はこのところ学校に行っていない。理由は自分でもよくわからない。ただ、なんとなく、朝になるとだるくなってしまふ。でも少しすると登校できる気がする。そう思って外に出てみるけれど、途中でやっぱり引き返してしまう。その繰り返しの毎日だ。今日こそ行けると思ったけれど、やっぱり途中で立ち止まってしまって、こうしてアメンボをぼんやり見ている。本当はキラキラに光っているはずの水も、今の俺にはモノクロにしか見えない。世の中はどうやら、そうだ。心配したお母さんは俺を病院やカウンセリングやらに連れて行った。俺は別に病気なんかしていない。ただ、やりにくいのだ、生きるということが。ほんとうなら、心配させないようにしたいけれど、そう思うとまた、気持ちを手で強く握られてるみたいに苦しくなった。アメンボみたいに水の上を簡単に浮かべたらきっと、もっとやりやすいのだろう、生きるということは。そうやって田んぼの前でしゃがんでいる俺の隣に、人影が見えた。それがクラスメイトの湯川だと俺は気づいた。湯川は俺の顔をのぞきこんで言う。

「なにしてるの？」

彼女の顔の近さに俺の心臓は速くなる。

「な、なんでもねーよ。つーか学校は？」

そう言って、少し距離を広げる。

「ケガして病院寄ってたから、今日は遅刻。ここになんかいるの？」

湯川はまた近付いて、俺に聞く。

「べ、べつに……。ただアメンボ見てただけだって」

俺はまた、少し距離を広げた。

「アメンボかぁ、どれどれ……」

湯川は水の中をのぞきこむ。女のくちびるって、柔らかいのかなぁ……。俺は湯川の横顔を見て、そんなことを思う。心臓の音が聞こえてくると、耳たぶが熱くなっているのがわかった。

「いないよ」

湯川が俺のほうを向く。俺は耳を手で隠しながら、「そう」と答えた。

「学校来ないの？」

「ど、どうでもいいだろ」

ぶっきらぼうにそう返すと、湯川はランドセルから何かを取り出した。俺は耳を手で隠したままだ。

「ここにね、こういうマークを書くの」

ノートと鉛筆を持った彼女はそこに、「ニコちゃんマーク」を書いた。そして、「はい」と俺にも描くようにそれを渡した。俺は耳にあてた手をゆっくり戻して、彼女の言うままに「ニコちゃんマーク」を書いた。

「それで？」

俺がそう言うと、

「それだけ」

と、彼女は答えた。

「なにそれ」

「あたしもあんまり学校好きじゃないんだ。授業中とか、そればかり書いてる。書いてるとなんか、少し落ち着くの。だから、ひなたくんも一緒に書いて？ 授業中、ふたりだけ同じことしてると思ったら、なんか勇気が湧くような気がするから」

彼女はまた水の中を覗き込み、それから「あたしね」と、言葉を吐いた。

「十五才になったらしたいことがあるんだ」

そう言った彼女のくちびるにまた見とれて、耳が熱くなったのを感じ、思いだしたように手で耳を隠した。

「なんで耳隠してるの？」

「べつにいいだろ」

「痛いなの？」

「痛くないって」

「ちょっと見せてよ」

彼女は俺の手を取ろうとした。触れられてますます耳が熱くなっているのがわかる。だから、それを離すわけにはいかなかった。

「やだよ」

「いいから」

「よくないって」

手を振り払うと、彼女の態勢がくずれた。

「あっ！」

声を出した、彼女の体は田んぼのほうに傾く。

「あっ！」

俺は両手を耳から離し、倒れそうになった彼女の体をこちら側に起こした。その勢いで、おれと湯川は抱きあった形になった。それに気が付き、お互いが「はっ！」となって、すぐにそれを解いた。俺はそれがあまりにも恥ずかしくて、一目散にその場を立ち去った。

「話があるの」

ふたりでアイスを食べたあと、十五才になった彼女は唐突にそう切り出した。

「少し涼しいところに移動するか」

俺はそう返事をして、アイス屋の外に出た。等間隔に並ぶベンチには陽射しが降り注いでいたので、その先にある大きな木の下まで歩くことにした。木の下は日陰になっていて、心地好い風がゆっくりと吹いていた。

「あのね……」

彼女の言葉をさえぎるように、俺は言葉を重ねる。

「ああ、そうだ、さっき思いだしてたんだけど」

「何を？」

「田んぼでアメンボ見てた日のこと」

「アメンボ？」

「ああ、そう。十一才のとき。俺、湯川のこと見捨てて逃げちゃったんだよな。あれ、ずっと謝ろうと思ってたんだ、ごめん」

「ニコちゃんマーク」

「え？」

「あの日、学校でニコちゃんマーク何個書いたと思う？」

「何個だろ？」

「千個だよ」

「そんなに？」

「そんなにだよ。数えたもん。そんなに書かないと、私、落ち着けなかったもの」

俺は少し間を置いてから、本当に伝えたかったことを、言葉にした。

「そうか……でも俺がいまこうして風景に色を感じられるのは、あのニコちゃんマークのおかげだと思うんだ、ありがとうな」

「あのね……」

俺はなんとなく予感がしているのだ。あれからぼくらはなんとなく付き合ってるみたいになったけれど、彼女は付き合っていないと言うんじゃないかと。そう思ってから、彼女への想いがわかった。もう遅いのもかもしれないけれど。彼女のニコちゃんマークのおかげで、俺は学校に行くことが苦ではなくなった。授業中、彼女もそのマークを書いていると思うと、とても落ち着いた。千個も書いた彼女のように、俺だってそれ以上書いたに違いない。落書きのようなそれが、俺の愛のしるしだったのだ。

俺は、湯川が、好きだ。

そう心で叫んでから、言葉をさえぎるように、彼女のくちびるをキスでふさいだ。ああ、こんなにも柔らかいのか、女のくちびるは。風になびいた彼女の髪が俺の頬にあたったのがわかって、俺は彼女のくちびるから離れた。

「十五才になったらしたかったこと……」

彼女が言った。

「え？」

俺は少し戸惑う。

「ひなたちゃんとキスしたかったんだ」

「話って、それ？」

「うん……」

俺はなんだか疲れて、ふーっと息をついた。それから、なんのためらいもなく、気持ちを言葉にした。

「好きだ」

彼女はうなずいた。

「私も」

それから本当に自然なそぶりで、彼女の手を取って、歩き出した。通り過ぎたベンチにはひと組のカップルが座っていて、さっきの見られたのかと思うと少し恥ずかしくなった。それでも俺の心の中には幾千もの、ニコちゃんマークが浮かんでいた。

## #34 野球場に寄る

### SIDE-sae

口の中にチーズアイスの香りがまだ漂っている。私は夢の中でまたそれを食べていた。あ、これは夢だなんて気が付いて、ゆっくりと目が覚めると、フロントガラスの向こうには、大きな建物が映っていた。

「え、どこ？」

シートベルトを外す仕種をする、たてうちくんに、私は問いかけた。

「ああ、起きた？ 寝ててもよかったのに」

たてうちくんはのんきにそう言葉にし、続けた。

「いや、まっすぐ帰ろうと思ったんだけど、なんか試合やってる感じがしたから、ちょっと寄ってみようかと思って」

「試合？」

そういえば、なにやら歓声が聞こえる。

「ちょっと見ようと思うんだけど、彩映さんここで待ってる？」

こんな暑い車の中で待たされるわけにはいかない。私は少し不機嫌に「しょうがないから行くよ」と答えた。「それはよかった」と、たてうちくんは例の”天気がいいね”の言い方で返した。口の中に漂うチーズアイスの香りを吸い込んで、少し不機嫌になった気持ちを和ませながら、たてうちくんのあとを付いて行った。

「ああ、もう7回か」

野球場だったそこでは、当然のごとく野球の試合が行われていた。

「じゃあ、あと2回で終わりだね」

野球は9回までというルールと、「サヨナラホームラン」という言葉しか私の頭の中には入っていない。ベンチに腰掛けて、そんなことをたてうちくんに言ってみると「いや、7回で終わりだよ」と彼は答えた。

「え？9回じゃないの？」

「これ、中学の軟式野球だから、7回で終わり」

「軟式って？」

「柔らかいボールのこと。まあ、当たったら結局痛いけど」

「へえ」と私はうなずきながら、中学生の試合を見た。中学生と言っても、投げるボールは速いんだなあとは少し驚いた。

「0対0か。ツーアウト三塁、バッター四番。これ、打ったらサヨナラだよ」

「サヨナラ？ ああ、”サヨナラホームラン”のことだね」

「ホームランじゃなくても、サヨナラだけど」

と、よくわからないことをたてうちくんは言った。わたしは「ふーん」と適当に相槌を打って、ふと周りを見渡した。そして、ひとりの女の子に目が止まった。その子は祈るように手を握ってグラウンドを見ていた。その表情は、今にも泣きそうだ。そういえば私は野球にほとんど興味がないけれど、ひとつだけ覚えていることがある。

それは中学生のときのことだ。野球部の男の子が、陸上部のマネージャーをしていた私のところまで転がってきたボールを拾いに来た。私がぼんやりとその子の様子を見てしていると、ふいに「危ないっ！」という声が聞こえた。それが私に向けてのものだと体が察知して、私はとっさに顔を背けた。「バンッ！」という音だけが残って、顔を戻すと、目の前にさっきのボールを拾いに来ていた彼がいた。

「ごめん、だいじょうぶ？」

「取ったの？」

私はびっくりして彼に聞いた。だって、球を拾いに来たとき、私と彼は十メートル以上も離れていたはずだ。それがいまは目の前にいる。その瞬間移動みたいな速さに私はびっくりしたのだ。

「取ったけど。ごめん」

「すごいね」

「気をつけるから、ごめん」

そう言って彼は野球部のほうへ戻っていった。そんなことを思い出したとき、目の前では歓声がこだました。

「いやあー、サヨナラかあ……」

たてうちくんが天を仰いでそう声を出した。

「ホームラン？」

「ヒットだよ、センター前」

またよくわからない単語が出てきた。それって何？ と聞こうとしたけれど、たてうちくんはふーっと息をついて、少し考え込むような態勢を取っていたのでやめた。私は、祈るように手を握り締めていた女の子のほうを見た。彼女は涙を流している。喜びの涙ではなさそうだ。彼女ももしかして、当たりそうになったボールから、誰かが守ってくれたりしたのだろうか。

「帰る？」

「うん。あ、ねえ、もし今ボールが飛んできて、私に当たったらどうする？」

「なぐさめる」

たてうちくんはわざとらしく笑っている。

「ひどいひとだ」

「当たる前に気が付いたら、取るよ」

「ほんと？」

「たぶん」

「やっぱり、ひどいひとだ」

だけどなんとなく、たてうちくんは私を守ってくれるような気がした。ただなんとなく。ほんとうに、なんとなくだけれど。

## #35 ケーナの音色

いつもの朝だ、と思った。いつも通りの、ぼーとした目覚めだと。あたしはほほを叩いて起きてない脳に刺激を与える。カーテンを開けると、まぶしい光が差し込んできた。うん、いつもの朝だ。制服に着替え、ダイニングで朝食を取る。今日はパンだ。大好きなクロワッサン。それから低脂肪牛乳。それを、飲み干して「ぶふぁあ〜」と声を上げる。うん、いつもの朝だ。

「なんだ、今日は学校あるのか？」

オヤジが不思議そうに聞いてくる。これはいつもの朝じゃない。

「そりゃ、あるよ」

と答えて、テレビの時計を確認してみる。あれ、「めざましテレビ」がやっていない。これもいつもの朝じゃない。

「え、今日って日曜？」

「そうだよ、おはよう」

ああ、しまった、やっぱりいつもの朝じゃない。だけどいつも通りの朝の気持ちになってしまっている。これはもう、仕方がない。そう思って、あたしは当たり前のように玄関に向かった。

「学校行くのか？」

「うん、行ってきます」

そういうことにしておこう。だけど学校には向かわず、いつもは行かない丘の上の美術館に向かった。別にあたしは美術に嗜好があるわけではない。ただこんなふう間違っただけなら、優雅な気持ちにでもなってみたくて思ったのだ。美術的なものが優雅なものだと、中学生のあたしは信じて疑わない。だって、やっぱり少し気高い香りがするから。そんなことを考えながら、学校へ行くのとは違う優雅な足取りで、美術館にたどり着いた。でもそこで誤算があった。信じられないことに美術館は休みだったのだ。こんなことってある？ 日曜日だよ！ なんで休みなのだ？ このいたいけな少女が、せっかく優雅な時間を過ごそうと思っていたのに。これが税金でできた代物だとしたら、将来、税金なんて払ってやらないだから。ていうか、ほんとは平日なんじゃないの。人もほとんどいないし。そんなふう心で文句を言いながら、仕方ないので丘の上の道を歩いた。すると、なにやら笛のような音が聞こえてきた。それはどこかで聞いたことがメロディだ。あたしはゆっくりその音のするほうに近づいていく。木陰に人がいるのが見えた。その人は、優しいメロディをその笛で奏でていた。それが心地よく、しばらくそれに聴き惚れていた。ああ、これは優雅だ。よかった、美術館は休みだったけれど、この音で優雅に過ごせた。目を閉じて、そう思っていると笛の音は止まった。そして、声が聞こえた。

「あなた、キタ中の生徒ですか？」

制服を見てわかったのだろう。その人はあたしのオヤジとおなじくらいの年のように見えた。けれど雰囲気は違う。オヤジというよりは「パパ」というのが似合いそうな空気をまとっていた。え、でも、もしかしてあたし、なんかされたりする？ 一瞬、そんな考えがめぐると、顔を背けて、足がかけだしそうになった。

「オガワユージって、ご存知ですか？」

そう聞かれてあたしは、顔をその人の方へやった。

「え、あ、クラスメイトですけど……」

「ああ、そうですか。彼は元気ですか？」

その人はおだやかな口調でそう言った。

「え、はい、元気ですけど…… あの、あなたは……？」

その人は、オガワくんの父親だと言った。離婚してユージには月に1度しか会えない、だからこで“ケーナ”を吹いて気分を紛らわしているのだと。

「そう、元気でよかった……」

あたしはオガワくんの父親の吹いていた“ケーナ”という笛が気になって見ていた。

「あの、いつもここで吹いているんですか？」

「いつもじゃないですが、昔からずっと、この笛の音が好きで」

「あ！」

あたしはそのとき思い出した。音楽の授業で「灰色の瞳」という曲を聞いていた時のことを。あたしの隣の席に座ったオガワくんは、その曲が流れているあいだずっと天井を見上げていた。どうしたんだろとあたしは同じように天井を見たけれど、何も変わったことはなかった。曲が終わってオガワくんは天井から顔を戻した。

「天井になんかあった？」

小声で聞いてみると、

「いや、なにも」

そう答えたオガワくんの目は少し赤くなっていた。

「これはケーナという南米の民族楽器を使った曲です」

先生がそう説明した。あのときのメロディだ。あたしは、オガワくんの父親に尋ねた。

「それ、"灰色の瞳"という曲ですか？」

「ああ、そうです」

「オガワくん、それ聞いて、泣いてました。たぶん」

「そうですか……」

オガワくんの父親は少し、黙った。あたしは言葉を続けてみた。

「あ、あの、オガワくん、野球部で…… こんど試合があるので見に行ったらどうですか？ そうだ、そこでそのケーナを吹いて応援するとか！ すごく喜ぶと思いますよ！」

「……いえ、行きません。次、会う日は決まっていますから」

そう言ってまた、「灰色の瞳」を奏でた。それを聞いていると、やっぱり優雅な気持ちになったけれど、少し淋しい気持ちも混じっていた。あたしは空を見上げる。天井を見上げたオガワくんの気持ちに少し近づいた気がした。そうだ、野球部の試合、見に行こう。こんどはちゃんと休日のはずだ。オガワくんのお父さんの想いも一緒に連れて。

## #36 飛びつくことのできなかったボール

### SIDE-tateuchi

最終回のおの場面は、忘れようとしていた記憶を甦らせた。0対0、ツーアウト三塁、バッターは四番。打球はセカンドとショートの間で飛んだ。十四才のぼくが飛びつくことのできなかったのと、まるで同じ軌道を描いている。あの時と同じようにセカンドを守る彼は、ぼくとは違い、そのボールに飛びついた。けれど、わずかにグローブは届かず、センター前にボールが落ちた。当然のごとく三塁ランナーはホームに帰り、サヨナラ試合となった。

ぼくはセカンドの選手を見ていた。あの時、彼のようにボールに飛びついていたら、ぼくの人生は大きく変わったのかもしれない。いや、大きくは変わらなくても、後悔はしなかったのかもしれない。夢や恋にぼくはちゃんと飛びついてきただろうか。自信はない。少しセンチメンタルな気分になりそうになったので、わざと明るめに「帰る？」と一緒に観戦をした彩映さんに言った。彼女は何を思ったか、

「うん。あ、ねえ、もし今ボールが飛んできて、私に当たったらどうする？」

と、ぼくに聞いた。なんとなく真剣な答え方をするのはよくないと思って「なぐさめる」と、笑って見せた。

「ひどいひとだ」

その言い方は、優しくもないけれど、怒っているようでもない。その感じに実は少しきゅんときた。

「当たる前に気が付いたら、取るよ」

「ほんと？」

ぼくはまた、きゅんとなってみたくて、わざとらしく笑ってみた。

「たぶん」

「やっぱり、ひどいひとだ」

その言い方は、やっぱりきゅんときた。彩映さんとぼくはそうやって、中学生の野球の試合を観戦したあと、再び車へと戻った。車のドアを開けたとき、猛烈に喉が渇いていることに気付いて、自販機に目をやった。

「あ、ジュース買ってくるけど、彩映さん、なんか飲む？」

「ううん、平気」

彼女の答えを確認してぼくは自販機に向かった。自販機の前に来てコーヒーの種類を選んでいると、カチャカチャとコンクリートに当たるスパイクの音が聞こえた。サヨナラ負けをくらったチームの選手が、グラウンドから出てきたのだ。そのときふいに誰かのグローブからボールが落ちて、ぼくが何をかうか迷っている自販機のところまで転がってきた。ぼくはそれを拾い上げる。

「すみません、ボール」

そう声をかけてきたのは、あのセカンドの選手だった。

「ああ、これね」

ぼくは彼にそれを渡しながら、

「最後の打球、惜しかったね」

と、伝えた。すると彼は悔しそうに「惜しかったけど、捕れなかったんで、悔しいです」そう言葉にした。

「そうか、でも……」

”きっと君はこれから夢や恋に飛びつく人生を送れると思うよ”

そんな言葉を用意していたけれど、言うのをやめた。なんだか説教じみてしまいそうで、そういう大人を見せたくはないと思ったのだ。ぼくは用意した言葉を変えて、想いのまま伝えた。

「でもいい試合だったよ」

そんなことを言ったとき、球場から笛の音が聞こえてきた。応援の笛か？試合は終わったというのに。

「あ！」

セカンドの彼は思い立ったように声をあげ、それから軽く会釈をして、また球場の中に入っていった。ぼくは自販機に顔を戻し、コーヒーをかうのをやめて、スポーツドリンクのボタンを押した。それを持って車に戻ると、彩映さん

が待っていたようにぼくに言った。

「"灰色の瞳"だね、この曲」

どうやら、聞こえてくる笛の曲名がそれのようだ。

「なんか悲しいタイトルだね」

「そうかなあ？ でも、いい曲じゃない？」

「まあね」

「なにその言い方」

「気に入らなかった？」

「うん」

センター前に抜けていくボールのように、ぼくは彩映さんの言葉をやっぱりとれないのかもしれない。それでも笛の音に合わせて適当に歌詞をつけて歌ってみると、彼女は笑いだした。

「なにそれ」

それは優しくも怒ってもない、あの感じだ。

「変？」

「変だよ」

ぼくはこうやって彩映さんのボールに飛びつこう。そんなことを思いながら、車を発進させた。

## #37 別れ際

### SIDE-sae

野球場に着く前も寝ていたというのに、帰りの車の中でも、私はまたウトウトとしていた。寝不足なわけじゃない。たてうちくんが運転する車に乗ると、私はいつも眠くなるのだ。これは付き合う前も付き合ってから、そして別れてからも変わらない。他の人の車ではそんなことはないのに。不思議だけれど、そうなのだ。

「寝てていいのに」

いつものセリフをたてうちくんが吐く。

「うん……」

と言いながら、目をパチクリとさせてみる。でも、やっぱり眠い。どうせなら、運転してた方がいい。その方が目が冴える。そう思って「運転代ろうか？」と聞いてみたけれど「そんなに眠そうな人と代われるわけないしょ」と言われてしまった。普通に考えたら当たり前だ。普通に考えられないほど眠いのだ、やっぱり。私はそうやって起きるのをあきらめて、目を閉じることにした。そのとき、バックの中で携帯電話が震えている音が聞こえた。私は無視しようと思ったけれど、4度目のバイブコールで目を開けた。私の負けだ。仕方なく携帯電話を取り出すと、「太田花」という名前が表示された。

「あ！ うそ、え！あ、ごめん、電話出ていい？」

たてうちくんは、「どうぞ」と返事をした。

「もしもし、花ちゃん？」

私のほうから先に聞きだすと、彼女は「うん」と静かな声を出した。花ちゃんとは1ヶ月ほど前に、十勝のなんていう町か忘れてしまったけれど、お蕎麦屋さんで出会った。あれは、たてうちくんと「別れる」と決めた日のことだ。私は誰かと別れを決めるとき、決まって車を走らせる。そうしてただ、運転に集中していると、落ち着いてくるのだ。その日も気持ちを静めるように、ゆっくり車を走らせていると、いつのまにか十勝の方まで来ていた。気持ちを静めるまでに、何百キロの距離が必要だったということだ。そして、おなががすいたところで、そのお蕎麦屋さんに入ったのだ。

「えー、びっくりしたよ。あれからどう？ 元気？」

「うん、ちゃんと生きてますよ」

そうだ、そのお蕎麦屋さんで、彼女は死んだような顔をしていたのだ。

「そっかあ、よかった。ねえ、あの蕎麦、食べたの？」

「ほとんど人にあげちゃいました」

死んだような顔をしていた彼女に、そのお蕎麦屋さんのお兄さんが「蕎麦打ってみる？」と唐突に言った。彼女は戸惑って「え、いや……」と言葉を詰まらせていた。戸惑ってる彼女の横で、私はそのお兄さんに「あの、私やりたんですけど」と言ってみた。一瞬、いやらしい言い方だったかもしれないと思って顔が赤くなったあと、「じゃあ、私もやります……」と彼女が言ったのだった。

「あげたの？ 板チョコみたいだっから？」

「板チョコみたいだけど、ほんとにおいしかったですね、あの蕎麦」

私も彼女も初めて打つ蕎麦に悪戦苦闘して、まっすぐに切ることもできずに、板チョコみたいなってしまった。そのお蕎麦を茹でて、つゆにつけて食べた。「きみら、ひどいことになってるな」とお兄さんは笑って、私たちも同じように笑った。だけど、その板チョコみたいな蕎麦の味は、格別においしかった。

「ほんとにおいしかったですよね。あげるなんてもったいないなあ」

「ほんとにおいしかったから、誰かにあげたくなっただけです。喜んでほしくて」

あのとき格別においしいその蕎麦を食べて、彼女は少しは表情を取り戻したけれど、それでもふっと淋しい顔が浮かんでいた。私はそれが気になって、その日彼女と行動を共にした。だけどそれで何ができるというわけでもなかった。それよりも彼女と一緒にいて、私はただ楽しかったのだ。次の日の仕事をズル休みして、一泊してしまうほどに。あ

れは、まるで修学旅行のようだった。

「でも、もらった人びっくりしてたしょ？」

「うん、でも、やっぱりおいしいって言ってくれました」

「あ、わかった。その人、男の人だ？」

「え、あ、うん、そう。やっぱりバレました？」

たぶん彼女はその人が好きなのだろう。恋の悩みを聞いてほしいのだ、きっと。それがわかって、穏やかな気持ちになったけれど、少しだけ、嫉妬のような気持ちも混ざった。車の中ではちょっと落ち着けないなと思った私は、「またあとで電話するね」と言って電話を切った。

「板チョコの蕎麦が気になる」

と、たてうちくんがボソッと口にした。

「あ、あのね、この前、十勝に行ってねえ...」

私はそれから彼女とのことを話した。それをたてうちくんは「うんうん」と、相槌を打って聞いていた。あ、私、勝手に話し過ぎてるなと思いながら、言葉が続いてしまって止められなかった。それに気づいて、

「.....あ、ごめん、なんか一人でしゃべってた」

と、少し反省して言葉にした。

「いいけど。それにしても板チョコの蕎麦って、ほんとにおいしいの？」

「おいしいんだって。ほんとに。なんならウチ来る？たしかまだ残ってたし」

「蕎麦って、そんなに持つの？ それに”ウチ来る”って、別れた男に言うことじゃないしょ」

そう言われて、私ははっとした。そうか、そうだ。私たちは別れたのだ。気軽にそんなことを言うてしまうのは、よくないことだ。なんというか私はやっぱり、たてうちくんに気遣ったりできない。

「そうだね、今のはだめだね」

「うん、だめだな」

「難しいんだね、こういう関係って」

「簡単なときもあるけどね」

「そっか」

「あ、そうだ」

思いだしたように、たてうちくんが言って、車を停めた。

「どうしたの？」

「目、覚めた？」

さっきの電話から、私はすっかり目が覚めてしまっていた。

「うん」

「じゃあ、運転代って？」

「うん、わかった」

そう言って、たてうちくんが助手席をゆずり、私が運転席に座ると、たてうちくんは「おやすみ」と言って、目を閉じた。私、ほんとは別にたてうちくんのこと嫌ってわけじゃないのかな。ふっとそんな想いが浮かんできたけれど、だからってどうしたいこともない。できればこのままで続いていけばいいと、そう思っていた。

\*

あ、なんか歌ってるな。そう気がついて眠りから覚めたけれど、目は開けなかった。目を開けると、ついさっき見ていた夢を忘れてしまいそうだからだ。その夢は別に幸せな夢ではない。かといって不幸な夢でもない。どのカテゴリに入るかと言えば、「どうでもいい」といったところだ。けどなんとなく見ていたい。そんな変な夢だ。

「たてうちくん」

彩映さんがぼくに声をかけたとき、その変な夢の残片は見事に消えてなくなってしまった。起きてすぐ忘れる、あの感じ。それは誰が悪いでもないの、うーっとため息に近い声を出し、今、起きたふりをして体を伸ばした。

「着いた？」

「うん」

「じゃあ、代ろうか」

そう言って、ぼくは助手席を降り、彩映さんは運転席を降りた。彼女はドアのそばに立ち、ぼくは運転席に座ってシートベルトを装着する。

「あぶないよ、離れないと」

そう注意すると彩映さんは少し離れた。

「あ、ねえ、彩映さん、さっきなに歌ってたの？」

「え？なんか歌ってた？ 私」

「うん、無意識？」

「そうかも。でもたぶん、テレサ・テンとか、石川さゆりとか……」

彩映さんはぼくより少し年上、とはいえまだ二十代後半だ。選曲が古すぎやしないかと、ぼくは笑った。

「おかあさんがよく歌ってたから、覚えちゃったんだよ」

「そっか。不倫とか大恋愛でもしてるのかと思った」

テレサ・テンとか石川さゆりの曲のイメージをそのまま言っただけなのだけど、

「なにそれ」

と、彩映さんの眉間が少し険しくなったのを見つけて、すぐにその言葉を取り消した。

「なんでもない、なんでもない。それじゃ、また」

「うん、また……」

ぼくはそうやって、彩映さんと別れた。

なんとなく彩映さんが浮かない顔をしていたのが見えた。なんか、つまらないことを言ってしまったな、きっと。モヤモヤとした気持ちになってしまって、ぼくは後悔した。彩映さんの部屋から少し離れたところに一度車を止め、また目が覚めたときのように、体を大きく伸ばした。それから、ドアをあけて外に出て、星空を見た。そうだ、カラオケしにいこう。突然、そう思い立った。一人でおもっきり声を吐きだしたい。うん、カラオケがいい。瞬いている星も、その方がいいと言っているようにぼくには思えた。

## #38 カラオケ

### SIDE-kawai

あー、つまんない。そもそも乗り気じゃなかったのだ。というか、合コンなんて聞いていないし。「今、飲んでるんだけど、来ない？」と友達から電話があって、ちょうどそれがお腹が空いていたときだっただけの話なのだ。お腹が満たされてしまったからには、もう用はない。さっきから「趣味は？」「休みの日は何してんの？」「映画とかすき？」「兄弟いる？」そんなことを隣の男が聞いてくる。カラオケの音とそれが混ざり合って、聞いていることさえ面倒くさくなる。

「ちょっと、トイレ行ってくるから」

最終通告のようにそう言ったあと、私はドアを開けて、その場を抜け出した。あとで友達に「具合悪いから先帰るよ。お金、明日払うから、ごめん」そうメールしようと思った。少しは悪いなと思ったけれど、もともと数合わせに呼ばただけだ、私がいなくてもまた誰か呼ばれる。そう思って罪悪感を打ち消した。そうして出口のほうへ向かっていると、ギターを持った男の人が、フロントでなにやら口論になっているのを見かけた。

「いいしょ、べつに。アンプつないで音出すわけでもないんだし」

「一応規則ですから。楽器は持ち込めないんですよ」

「え、じゃあさ、このマラカスは？ これ楽器じゃないの？」

「これは当店のものなのでお使いいただけますが……」

「アコギはだめで、マラカスはいいなんて、差別だと思うけど」

「そう言われましても」

どうやら、その人はギターを持ち込みたいようだ。ギターがなくても歌えるのに。そう思いながら近づいていくと、その人がたてうちさんと気が付いた。たてうちさんは仕事の先輩だ。ひとりで来ているのだろうか。

「たてうちさん、なにしてるんですか」

声をかけると、たてうちさんは振りむいて、「おっ」と声をあげた。

「河合さんもカラオケ？」

「いや、えっと、そんなところですよ」

私は少し口ごもった。

「帰るところ？」

と聞かれて、「はい」と答えたあと、なぜか反対の言葉を言っていた。

「……いや、あ、たてうちさん、一人だったら一緒に歌いませんか？ 私、あんまり歌ってなくて、なんていうかスカッとしたいんですよ」

そう言った後、たてうちさんの返事も待たずに、私はフロントのおにいさんに言った。

「あ、おにいさん、ふたりで。あ、このひとのギター預けておきますから」

「え？ 預けるの？」

たてうちさんはびっくりしている。

「かしこまりました」

フロントのおにいさんが話を片付ける。

「俺、一人で歌うつもりだったんだけど。ギター弾いて」

たてうちさんがそうつぶやく。

「ギターなら外でもいいじゃないですか。とりあえずカラオケしましょうよ。それからでも遅くないですよ」

「いや、夜遅くて迷惑かと思うけど」

「カラオケなら迷惑かかりませんよ」

そんなふうは無理やり説得した。たてうちさんはあきらめたのか、「そうか、そうするか」と自分を納得させるようにうなずいた。

\*

## SIDE-tateuchi

河合さんはどうやら相当ストレスがたまっていたようだ。さっきからアップテンポの歌ばかり歌って、そしてやたらと梅酒を注文する。

「たてうちさんは飲まないんすか？」

たぶん、河合さんはすでに酔っている。酔うと少しガラの悪い口調になるようだ。でもそれも不自然な感じではない。「車だから、飲めないよ」そうまじめに答えると「そうすか、残念ですねえ」と、言ってハハハと笑った。お酒を飲めないのが残念ではなく、ギターを弾けないのが残念だ。そう返事してみると「弾いたらいいじゃん、持ってきますよ」と、河合さんはドアを開けようとした。

「いや、面倒になるからいいよ」

さっき面倒なことをしていたのは自分だということを棚に上げて、ぼくはそう引きとめた。というか、フロントに預けたのは彼女のほうだ。それをどうやらもう、忘れてしまってるらしい。まあ、酔っているのだから仕方がない。

「いいならいいんすけど、たてうちさんもなんか歌ってください」

ぼくは河合さんの歌いたいオーラに遠慮して、ただぼーっと彼女の歌を聞き続けていた。途中から、別に歌わなくてもいいなと思い始めていたところだった。

「歌い疲れた？」

「はい、ちょっと休憩します」

なんだやっぱりそういうことか。でもまあちょうどいいか、そう思ってぼくは、ギターで歌いたかったビギンの「声のおまもりください」を歌い始めた。流れを無視してのバラードってやつは、急に空気がおかしくなる。いつもはそういうのを敏感に感じ取るけれど、今はそれも関係なくただ歌った。案の定、河合さんはそれを感じとったのだけど。

「なんかしんみりしちゃうんですけど」

間奏のあいだ、彼女はそう言って、また梅酒を飲んだ。

「やっぱり？ 満足したから、次入れていいよ」

ぼくは演奏停止を押して、曲を終わらせた。

「え、いや、聞いてたんですけど……」

「そう。あ、そうだ、リクエストしてもいい？」

ぼくは急に思い立って、そう聞いた。

「なんすか？ 知ってる歌ならいいですよ」

「テレサ・テンか石川さゆり……って、それこそしんみりしそうだけど」

そうだ、間違いなくしんみりする。というか、ぼくよりさらに若い彼女が知っているかどうかわからない。そうも思ったのだけど、それは杞憂に終わった。

「古っ！ でも、知ってるのありますよ」

「"天城超え"と"津軽海峡・冬景色"と"時の流れに身をまかせ"以外でね」

有名どころの曲を言ってみて意地悪したけれど、河合さんは「それはサビくらいしかわからないので歌えませんが」と言う。ぼくの意地悪は効果を発揮しなかった。そして彼女が送信ボタンを押して、「能登半島」という曲が流れ出した。

「知ってます？」

「いや……」

イントロが終わり、こぶし混じりに歌いだす。それと同時にぼくは彩映さんと車に乗ってるときに見た夢のことを思い出した。やっぱり「どうでもいい」夢だ。思い出して、確信した。なのに胸に残っているのはなぜだろう。不思議な気持ちで、河合さんの歌う「能登半島」を聞いている。彼女はなかなかどうして、演歌も上手に歌いこなす。上手というか、味のある感じというか。そういえば彩映さんが歌うと、ちびまるこちゃんの「まるちゃん」が歌うような感じになって、ぼくはいつもほほえましくなってしまう。彩映さんて、本当につかみどころがないんだよなあ。なんてことを思いながら、サビに入ったところで、ハッとした。さっき彩映さんが歌ってたの、これだ。ぼくはもうそれは河合さんの歌声ではなく、彩映さんが歌っているように思えてしまった。トランペットの音が余韻を残して、静かに曲が終わると、河合さんは「は～、すっきりした～」と言って、また梅酒を飲んだ。

「あのさ、さっきちょっと夢を見てさ」

そうぼくが切り出すと、河合さんは、

「歌、聞いてなかったんすか、せっかくリクエストに答えてあげたのに」

と、少しふてくされた。

「いや、いまじゃなくて、さっき友達と遊んでて、帰りの車の中で見た夢なのだけど」

“友達”と呼ぶのに少しためらった。わざわざ「元カノ」と呼ぶのも違うしな、と思いながら。

「あ、なんだ、そうですか。どんな夢ですか？」

河合さんの機嫌はあつという間に、戻った。

「“日本の都道府県の形グランプリ”っていうのに出てて」

「なんすか、それ」

「日本の都道府県の形について語り合うっていう感じの」

「くだらねー」

「うん、くだらないけど、夢だから」

「まあ、夢ですもんね」

「そう、で結局、北海道の形がいちばん可愛ってことになった」

「あ、なんかそれ少しいれたいですね」

「うん、でもそこで、石川県を支持している人が異議ありって言って」

「石川県？ あ、能登半島だ」

「そう、そのひとは、能登半島の形のほうが美しいって言うんだよ」

「うーん、美しいっていうか手で作れそうですよね、能登半島って」

そう言って彼女は、能登半島の形を作って見せた。それがあまりにもそっくりで、「そうやってみたらなんか美しい」とぼくは笑った。それから、夢の中ではオーストラリア人が現れて、「ワタシタチハ、四国デハアリマセン」と言ってきたのだけれど、それはどうでもよかったので、言わないでおいた。というか、その能登半島の話もどうでもいいのだ。どうでもいいけど、話すとなぜかすっきりとした。ほんとうに「どうでもいい夢」なのに。

「あ。さっき、友達と車に乗ってたって言ってましたけど、ほんとは彼女じゃないんですか」

ぼくは虚を突かれたようになり「え？」と戸惑ってしまった。

「彼女が「能登半島」を歌っていて、たてうちさんが「それ、なんて歌？」って聞くんです。で、教えな一い。教えろよ一。やだ一。いいだろ一。ヒントはね、日本海。日本海？ うん。わかんね一よ。みたな」

彼女はそんなふうにとり芝居をする。ぼくはそれを見て完全な酔っ払いだと確信した。仕方ないので温かい目で見しておくことにした。けれど、少しは彼女の妄想もかすっている。話のついでに答えを教えることにした。

「彼女ではないけど、元カノで、「能登半島」を歌ってたことは正解だよ」

「元カノ？ 別れたのにデートしてるんですか？」

「デートじゃないよ。会ってるだけ」

「ふーん。あたしにはよくわからないなあ」

河合さんは少し考え込むようになって、また梅酒を飲んだ。

## SIDE-kawai

たてうちさんとカラオケをして、お酒を飲んだおかげで、合コンの分の無駄な時間は取り戻せたかなと私は思っている。でもそれは私だけのことであって、たてうちさんはやっぱりギターを弾きたかったのだらうと思う。私ほど、すっきりはしていないように見えるし。

「たしかにここなら迷惑かからないかもね」

だから私はカラオケを出た後、強引にたてうちさんの車に乗り込み、行き先をひたすらにナビゲートした。その間に、酔いが少し覚めてきた。導いたその場所は小高い丘の上。住宅は、遠く下に広がるだけ。

「でしょ？どうぞ、歌ってください」

手を広げて言ってみる。

「どうぞって言われてもな」

たてうちさんはギターを抱えて、ポンポンと弦を指で弾いた。

「あ、あれ、「声のなんとか」ってやつ、歌ってください」

「そうだねえ...」

たてうちさんはなかなか歌い始めようとしなない。仕方がないので、私は芝生の上に寝転がって、星空を見た。そういえば昨日はベランダで「ほろ酔い」を飲みながら、星を見ていたっけ。別れた彼氏が突然家にやってきて、それを追い払ったあとでだ。

「あ、たてうちさん。やっぱり私は別れた人と会う意味がわかりません」

たてうちさんは、「そう」と言いながら音を鳴らした。

「昨日元彼が来たんですけど、たまたま仕事で近くに来たとか言ってね、家にあがろうとするんですよ。なんか私、腹立ちちゃって。追い返したんですけど、間違ってますかね？」

「正しいんじゃない？」

そう言われて少しはほっとしたけれど、たてうちさんは、元カノと会っている。それって、どういうことなんだろう。

「でも、たてうちさんは元カノと会ってますよね」

「うん、まあ」

「どうしてですか？」

「友達だからだと思うけど。いや、友達っていうか..... 別に会わなくてもいいんだけど、いなくなると困る存在というか」

「それって、家族みたいな感じですか？」

「家族か..... 家族というよりは、年に数回しか会わない親戚のほうが近いかもなあ」

そう言った後、たてうちさんはギターで歌い始めた。でもそれは「声のなんとか」というバラードではなくて、懐かしい感じのする跳ねたリズムの、あったかい歌だった。

「いいですね」

「これ、サビ輪唱になるから、歌って？」

「え？」

「ついてきて」

「いや、あの、え」

本当は、人との関係はたてうちさんのように、ちょうどよい距離感で繋がっているのかもしれない。だとしたらやっぱり、元彼とは会わない距離が、ちょうどいいのだ。私にとっては。でも、たてうちさんが少し、うらやましい。そんな気がしながら、私は輪唱についていった。

## #39 お寿司を食べに

### SIDE-sae

「不倫とか大恋愛でもしてるのかと思った」

テレサ・テンか石川さゆりを歌っただけで、そんなふうに言われるのはいい気分じゃない。でも、他の誰かに言われたなら、気にせず笑って済ませたのだろうと思う。なのに、たてうちくんに言われると、モヤモヤしてしまう。なんなのだろう、このモヤモヤは。好き、嫌い、好き、嫌い…… 花占いでもするみたいに、巡り巡って「そういうんじゃない」という答えがとても正しい気がした。だって、たてうちくんにはもう、「ぎゅっ」てされたいと思わない。だからたぶん、「そういうんじゃない」のだ。

階段を昇りながらそんなことを考えて、部屋のドアを開けると、真っ先にベッドに転がりこんで大の字になった。くせのように携帯電話を開いて、適当にボタンを押す。「太田花」という文字を見て、あとでまた電話するって言ったことを思い出した。私は寝転がったまま、着信履歴から彼女に電話をかける。電話に出たのは彼女ではなく、「電波の届かない場所にいるか、電源が入っていないためかかりません」という、無機質なアナウンスの声だった。仕方なく電話を切ったすぐあとに、着信音が鳴りだした。花ちゃんかな。そう期待してディスプレイを見てみたら、母からだった。

「もしもし、彩映？」

母の声は饒舌だ。うれしいことがあったときの感じだ。

「うん、なんかいいことでもあったの？」

「そうなの、宝くじが当たってねえ」

とは言っても、億万長者になったわけではなく、5万円ほどの当たりを引いただけだそうだ。それでもそれはうれしかったらしく、つい、特上のお寿司を頼んでしまったから、食べにこないかという誘いの電話だった。

「もうご飯食べちゃった？」

あいにくまだ夜ごはんを食べていなくて、私にとってもラッキーだった。

「ううん、まだ」

「じゃあ、おいでよ」

一人暮らしの私の部屋から、1キロほど離れたところに母の家はある。私が二十歳のとき、両親は離婚して、いまは、母も一人で暮らしている。

「うん、あ、でも少し疲れてるから、あとで行くよ」

「疲れてるの？ だいじょうぶ？」

「だいじょうぶだよ。あ、あのさ……」

「なに？」

「おかあさんがご飯作ってるときに歌ってた歌って、なんだっけ？」

ふとたてうちくんの車を運転しているときに、無意識に歌っていた歌のことが気になって、そう聞いてみた。たぶん、私の覚えている歌は、母がご飯を作る時に歌う歌なのだ。

「え？ 歌なんて歌ってた？」

「歌ってたよ、テレサ・テンとか石川さゆりの……」

母も無意識だったのか。

「あ、確かに歌ってた気がするけど、ご飯作るときだったけなあ？」

と、母は考え込んでいるので、私は無意識に歌っていたメロディを口ずさんでみた。すると母は、思いだしたように「あ！」と声を出した。

「それ、“能登半島”よ。石川さゆりの」

「能登半島？ こりゃまた演歌って感じのタイトルだねえ」

そうか、能登半島というのか。母はそれを歌いだして、私は首を揺らしながら、それを聞いた。そしてよくよく、歌の意味を考えてみると、それは演歌特有の悲恋だということに気が付いた。それを小学生のころから口ずさんでいたかと思うと、そのギャップに笑ってしまった。電話を切って、やっぱりまだ疲れが抜けない私は、しばらくベッドに

横になって、それから読みかけの本を読んだり、音楽を聞いたりして過ごした。そういえばたてうちくんが言ってたな。たしかあれはショーペン……、えっと、ショーン・ペン？ いや、ショーン・ペンは「アイ・アム・サム」に出てた役者だ。役者の話じゃない、哲学の話だ。ショーペンなんかかっていう哲学者がおもしろいことを言っているのだと。「人生の苦しみを和らげる方法っていうのが3つあってさ、一つ目は、芸術にふれること、二つ目は、同じ苦しみを誰かと共有すること、で、3つ目は何だと思う？」

と、たてうちくんは聞いた。

「なに？」

「気絶すること、だって」

そんなことを言って笑ったのだ。私はどうやら、一つ目の芸術にふれることでリラックスできていた。気絶しなくてよかった、と思いながら、母の家に向かう準備をはじめた。

\*

「あ」

その文字の正しい言い方を教えてもらったときのような。たぶん私の口の形はそんなふうにフリーズしている。母の家に向かう途中、自転車で信号待ちしていたところ。通りすぎた一台の車、それは間違いなくたてうちくんの車だ。

「え？」

またその正しい使い方をして、フリーズしている。助手席には女の子がいた。たぶん私より若い。でも、私の方が少し勝ってる。勝ってる？ 何が？ 信号が青に変わる。青に変われば進むだけ。見なかったことにしよう。見間違えたことにしよう。うん、そうだ。よく似た人だ、きっと。そう思い込みながら、どこかやるせない気分が抜けなかった。それからとぼとぼと自転車を走らせ、母の家に着いた。

「ああ、彩映、おかえり」

出迎えた母は、さあさあと急かすように私を部屋に招き入れた。5万円の宝くじがそんなにうれしいか。私は少しイラついてしまった。そして何も言わず、ただ目の前にあったお寿司をガツガツと食べはじめた。

「そんなにお腹空いてたの？ まあ、でもうれしいわ、たまのぜいたくっていいよね」お茶で特上のお寿司を流し込みながら、私はなんだか泣けてきた。鼻を手でつまんだのは、思ったよりわさびが多かったというだけが理由じゃない。

「なに泣いてるの、わさびが効いた？」

「そんなんじゃないよ」

「そう、相変わらず彩映の泣くポイントはよくわからないわ」

私だってどうして泣くのかよくわかってないのだ。なのにそんなことを言われて、無性に腹が立ってしまう。そして少し攻撃的になる。

「もっと早く離婚しておけば、私のこともわかったと思うよ」

母は私の言葉に、きょとんとしている。泣くポイントがわからないのと、早く離婚することがどう結び付くか、どうやらわかっていない。それもそうだと思う。なぜなら私も、こんなことを言うのは初めてのことだからだ。

「おとうさんもおかあさんもお互い愛情がないことは、私、ずっとわかってたよ。必死で仲の良いふりをしてきたみたいけど。私が大人になるまでは、そうやってたんだろうけど、そんなの優しさじゃない。そんなふうに我慢するから、私だって泣きたいときに泣かないように我慢したよ。そしたら、どんなとき泣いたらいいかよくわかんなくなってた」

私はそう、まくしたてた。ほとんど無意識のうちに出了言葉だ。こんなことを母に言うのも、ずっと我慢してきたのだ。また私はお寿司をガツガツ食べだして、そのたび鼻を手でつまんだ。わさびのせいなのか、泣いてるせいなのかよくわからなくなっていると、母は私の涙を手でぬぐって「そうだね…… ごめんね……」と言った。母を泣かせるのは本意じゃないので、私はわざとらしく「いいよ、お寿司なくなるよ」とうそぶいた。母はお寿司を食べて、鼻に手

をやった。

「おかあさんもわさびだめだっけ？」

「彩映ほどじゃないけど」

そう言いながら、わさびのせいか、別のせいかわからない涙が頬を伝っている。ああ、私は八つ当たりをしてしまった。本当のことでも、言わなくてもよかったはずだ。私はいま、たてうちくんと話したい。ただただ、話していたい。でもそんなふうに甘えちゃだめなのだ。しかたないからたてうちくんの代わりはこのお寿司だ。おいしいから、また食べたくなる。そうやって泣きながら、お寿司を食べたのだ。

## #40 ありがとうのために

### SIDE-sae

昨日のお寿司の味は、なんだかまだ心にとどまっている気がする。仕事をしながらそんなことをふと感じているとき、ドアが開く音がした。私は条件反射で、「いらっしゃいませ」と口にする。在庫確認をしていた手をいったん休めて、顔をあげる。

「彩映さん」

便せんや封筒を売る手紙屋で働く私の、今日の最初のお客さんは、私の名前を口にした。私は驚いて少しばかり間を開けたあと、彼女に返事をした。

「え、花ちゃん？」

そう問いかけると、彼女は大きくうなずいた。

「うん、昨日は電話出られなくてごめんなさい」

そういえば昨日は花ちゃんへの電話が繋がらなかった。お寿司を食べながら泣いたのはそのせいだ。そんなことを笑って言ったのに花ちゃんは、「ごめんなさい」とひたすらあやまった。

「いや、冗談だよ。花ちゃんは全然悪くないから、謝らないで。というか、札幌来てたの？」

「うん、彩映さんに会いたくなって」

と、うれしいことを言ってくれる。

「よく来たねえ。え、もしかして、昼間電話くれたとき、もう来てたの？」

「いえ、昼間電話してから、なんだか会いたくなって、思い立って飛行機乗ってたんです」

それはまるで彼氏みたいだと笑うと、彼氏じゃなくてごめんなさいと、花ちゃんも笑った。そうか、電話が繋がらなかったときは飛行機の中だったということか。十勝の蕎麦屋で彼女と出会って、私たちはいろんな話をした。私の働いているお店の写メを見せたとき、彼女はそれをえらく気に入った。私はその写メを彼女の携帯に転送してあげたのだ。そこにお店の名前が写っていて、そこから調べてここまでたどり着いたのだそうだ。連絡くれれば時間作ったのにと彼女に言うと、こういう変なことしてみたかったんです、と可愛い笑顔を見せた。私はそれがとてもうれしかった。

「ありがとう」

そう彼女はゆっくりと言葉にした。なんの前触れもなく言うので、「どうしたの、急に？」と私は戸惑いながら答えた。

「それだけ伝えに来たんです」

「それだけ？」

「うん。私が生きているのは、ほんとうに彩映さんのおかげだから。私が元気なのを、見せたかったんです」

彼女の目はきらきらしている。それを見ている私の目は少し潤んでいるのがわかった。私がなにか言葉をつなげようとしていたとき、二人目のお客さんがやってきた。反射的に私が「いらっしゃいませ」と口にすると、花ちゃんは、「それじゃ、私、帰りますね」と笑顔で言った。まるで恋人のように「やだ、帰らないで」と言いたいのをのみこんで「うん、来てくれてありがとう、気を付けて帰るんだよ」と、私は大人を演じて返事をした。花ちゃんは「うん」とうなずいて、お店を出た。

それから少しして、二人目のお客さんも店を出て、私はひとりになった。また在庫確認にとりかかって、そしていろいろと思っていた。ただ、ありがとうと言うために花ちゃんは来てくれた。私はたてうちくんにありがとうとどれだけ伝えられたらだろうか。いつも不機嫌になってしまっていて、うまく言えていないような気がする。そうか、やっぱり私はたてうちくんが大切だ。こんど会ったときは伝えよう。花ちゃんのように、ただありがとう、と。昨日のお寿司の味が、やっと消化されたような気がした。

## #41 キラキラ

### SIDE-tateuchi

「たてちゃんて、ギター弾くの？」

仕事が終わった後、同僚の北野君に声をかけられた。彼はぼくのことを「たてちゃん」と呼ぶ。「たてうち」だから「たてちゃん」。わかりやすいのだけど、彼以外にそう呼ぶ人はいない。それをぼくはなかなか気に入っている。ぼくはぼくで彼を「キタ」と呼ぶ。それは呼ばれたことがないとキタは言った。お互いに馴れないそれをわざとらしく呼ぶのを楽しんだりするうち、ぼくらの愛称は定着した。

「え、弾くけど。なに、突然？」

ギターの話などしたことがなかったので、ぼくは少し、戸惑いながら答えた。

「河合さんが、昨日、たてちゃんとカラオケしたって言ってたから」

ああ、そういうことか。ぼくは納得して、「なるほどね」とうなずいた。

「いいなあ。こんどそういうことあったら、俺も呼んでよ」

ぼくは一瞬、間をおいてから答えた。

「そういうことって、ほとんどありえないと思うけど」

キタは河合さんのことが好きなのだ。それを思い出して、ぼくは強く否定した。キタは「うーん」と腕組をしながらうなり、「まあいいけど」と息をついた。それから、「それより……」と言葉を続けた。

「俺もギター弾くの好きなんだよね。高校生のときはさあ、路上ライブとかしてて」

「へえ、そうなんだ。すごいね。プロ目指してたの？」

「目指してたねえ。夢見る年頃だったからねえ」

「まあ、そうか。それは健全でもあるよね」

「大人になってあきらめるのも、健全と言えるかねえ」

キタは少し、感傷的に言うので、

「それは飲みながら語ることにしようか」

と、ぼくは提案した。キタは笑いながら、「いや、歌いながらだ」と返した。

「プロレベルについていけるかわからないけど」

「いや、“プロになりたかった”レベルだ」

「限りなくプロに近かったレベルかもしれないし」

「それならきつと、まだあきらめてないかもねえ」

キタは静かに笑いながら、最後に言葉を付け足した。

「じゃあ、河合さんと歌った丘の上に集合で」

どうやら少し、嫉妬しているようだ。それなら河合さんも一緒につれていけばいいのにと思ったが、それはそれで面倒くさい気もしたので、言わずにおいた。ぼくからすれば、キタとふたりで歌う方が楽しいだろうという思いもある。男同士じゃないと語れないこともあるからだ。

「わかった。じゃあ、あとで。また連絡するわ」

ぼくらはいったん仕事場を後にし、帰り道を急いだ。

そういえばギターの1弦が切れたんだ。キタは予備の1弦を持ってるかもしれないけれど、この際だ、全部弦を張り替えることにしよう。そう思って、楽器屋に寄ろうとした。少し気分がよくなって早足になる。そのせいか、そこにたどり着く手前で、敷石につまずいた。よろけた体を起こすと目の前には、スポーツショップがあった。その店のショーウィンドウが目に映ると、ぼくの足はピタッと止まった。そこに飾られていたのは、ぼくが子供の頃に活躍していた野球選手のサイン入りのユニホームだった。彼を見て、ぼくは野球をはじめたのだ。「三つ子の魂百まで」。そんなことわざの通り、今でもそのユニホームには憧れてしまう。そうやってしばし見とれたあと、窓越しに映る自分の

顔が見えた。それを見て、ぼくはおどろく。そこに映っていたのは、いまのぼくではなく、子供のころのぼくだったからだ。

「うそだろ……」

あっけにとられてから、目を閉じてみて、深呼吸をしてみた。そしてゆっくり目を開けて、また窓に映った自分の顔を見た。そこにはいまのぼくの顔が当たり前のように映っている。あれは幻だったのだろうか。息を整えてまた、ユニホームを見てみる。それを見ているぼくは子供のころの気持ちになっている。野球選手になりたかったあのころの気持ちだ。いつからあきらめる理由を作るのが、うまくなったのだろう。ぼくは思い立って電話かける。すぐに電話に出たキタは、「まだ、早いつて」と笑う。

「ああ、俺もまだ帰ってないんだけさ」

「そんなに俺のことが好きかねえ」

そんな冗談にのってあげようとも思っただけれど、今はさらっと受け流すことにした。

「はいはい、好きですよー。でさ……」

「受け流したな、まあいいや」

「うん、いまふとスポーツショップのショーウィンドウ見てたんだけど、そこにユニホームがかかっているわけ」

「まあ、そりゃそうだろう」

「そうなんだけど、それ見てたら、俺もプロめざしてたこと思い出してさ」

「野球？」

「そう。なんかさ、別にいまからプロになりたいとは思わないけど、夢があったときのことを思い出すと、キラキラしてんなあと思ったわけ」

「いまはないの、夢？」

「あるよ、とりあえずキタとギター弾いて歌うこと」

「それ、簡単に叶うな。じゃあ俺は、河合さんを抱くことが夢だな」

「抱いて終わりか。けだもの」

ぼくは笑いながらそう言った。キタは必死になって「一緒に暮らして、幸せな家庭を築くという意味だ」と弁明した。

「ははは、わかってるよ」

「たてちゃんはそういうのわないの？」

「うーん、いまはそういう感じじゃないね。あ、いまからかっこいいこと言うから、録音しといて」

と、言ってみると、キタはあきれたように「はいはい」と答えた。する気ないとわかって、ぼくは言葉を続けた。

「彩映さんには……」

そのとき、左耳のほうから何かが迫ってくる気配を感じた。

「え、なに？」

右耳からはキタの声が聞こえる。

ショーウィンドウのユニホームはキラキラとまぶしいほど光った。

### SIDE-sae

たてうちくんの携帯が通じない。仕事が終わってから何度もかけているけれど、つながる気配はない。せっかく花ちゃんのように、「ありがとう」を伝えようと思ったのに。かんじんなときにいないんだから。いつもなら「仕方ないか」と思うはずだ。だけど、今日はどうしても「ありがとう」を伝えたい。「今日」じゃなきゃだめだ。花ちゃんだって、そう思ったから来てくれたのだ。気がつくと、私はたてうちくんの家の方向へ歩き出していた。付き合っていたときは、毎日のように通っていた家だ。久しぶりでもそこへの道のりは足が勝手に覚えている。

「うち来るって、別れた男に言うことじゃないしょ」

昨日言われた、たてうちくんの言葉を思い出して、少しだけ罪悪感に苛まれる。いや、ただ「ありがとう」と伝えるだけ。花ちゃんのように自然に。そう言いか聞かせて、その罪悪感を打ち消した。

やがてたてうちくんの部屋の前に着く。そして一呼吸おいて、呼び出し音を鳴らす。たてうちくんは出てこない。それをもう一度繰り返した。やっぱりたてうちくんは出てこない。私はバックに手をやる仕草をしたところでハツとなる。無意識に合鍵を探してしまったのだ。合鍵はもちろんない。別れたときにちゃんと返したのだから。私は急に胸が締め付けられるようになって、その場にしゃがみこんだ。また、たてうちくんに電話をしてみる。当たり前のようにたてうちくんは電話に出ない。しゃがみこんだまま、空を見上げてみる。

「シャッターを長く開けたままにしておくと、こうやって星が流れてるような写真が撮れるんだよ」

写真屋さんのたてうちくんがそう言って、移動して線になった星の写真を見せてくれたことを思い出す。目を開けたままなら、どれくらい我慢して、星を見ることができよう。そう思っただけをしないでいると、目が乾いて、涙が出てきた。仕方なくまばたきをしてしまったけれど、いまの私なら、移動していく星を記憶しておくができるような気がした。そんなふうに、ただただ星を見つめて、たてうちくんの帰りを待った。

そうして、少しの時間がたったころ、コツコツと靴のなる音が私の耳に入ってきた。私とその音の方向に顔をやると、男の人が、近付いてくのが見えた。たてうちくんではなかった。その人と目が合うと、お互いに小さく会釈をした。誰だっけと考えてみたけれど、その人も私を知っているような表情ではなかった。

ところがその人はしゃがみこんでいる私のところへやってくる。少し体がこわばるのがわかって、腹筋に力を入れた。早く通りすぎないかな、そう思っているのに、その人は、ポケットから鍵を取り出し、たてうちくんの部屋のドアに手をかけた。

「え？ あのー、ここって、あなたの部屋ですか？」

もしかして知らない間にたてうちくんは引っ越したのだろうか。そういうことだってあるかもしれない。それならまだいい、もしこの人が何かを企んでいるのだとしたら……こわばる私の体がますます硬直する。そんな私にその人は意外なことを口にした。

「あ、もし違ったらすみません。もしかして、伊東彩映さんですか……？」

突然、名前を呼ばれて私は混乱した。それでも「そうですけど……」とかわらうじて返事をした。

「あ、やっぱりそうですか。おれ、たてちゃんの同僚の北野っていいます」

たてちゃん？ たてうちくんのことか。同僚がなぜ、たてうちくんの部屋の鍵を持っているんだろう。え、うそ、そんな……たてうちくん、この人と付き合ってるのか……？ そんな妄想が浮かんで、ますます混乱は続いた。

「え、どこかでお会いしましたっけ？」

冷静を装って、そんなふうに聞き返す。

「いえ、彩映さんのことは、たてちゃんよく話してたし、写メとか見せてもらったことがあったので、なんとなくそうかなって思って」

「そうなんですか。でも、どうして北野さんが、たてうちくんの鍵、持ってるんですか？」

私は核心を突いた。彼は間髪入れずに、答えた。

「付き合ってるからですよ」

うそ！ そんな！ 私はフリーズした。

「冗談です」

彼は笑っている。ほんとに冗談のようだ。私はほっと胸をなでおろしたが、次の言葉を聞いて鼓動が速くなった。

「いや、今日たてちゃんと遊ぶ約束してたんです。でも、たてちゃん事故に遭ってしまって」

事故？ え、たてうちくんが？ うそ……

「たてうちくんは……」

無事なのかどうかを声にすることができないでいる私に、彼は答えてくれた。

「命には別状はありませんし、さっき病院行ったら元気そうでした。でもけっこう大きな事故で、腕を折ったみたいで、しばらく入院だそうです。で、入院生活は暇だろうから、家に行って使えそうなもの取ってきてほしいって、頼まれたってわけです」

よかった…… 私はほっとしながらも、速くなった鼓動を戻すことはできなかった。会いに行かなくちゃ、たてうちくんに会いに行かなくちゃ。

「どこですか、病院」

「えっと、いまは面会時間外なので会えませんよ」

「どうして？」

私はあきらかに理不尽なことを言っている。

「どうしてって言われても。あしたは会えると思いますよ」

「あしたじゃダメなの、今日じゃなきゃ…… 今日じゃなきゃダメなんだって……」

押さえられない感情を吐き出してしまう。ああ、すごい迷惑かけてる。でも今、会いたいんだ。そばにいてあげたいんだ。

「これ、聞いてください」

北野さんは携帯電話を私の耳に当てた。

「聞こえづらいかもしれないけど、きっとあなたには聞こえるはずだから」

再生ボタンが押されてピーっと鳴った。私は耳をすませてそれを聞く。

「彩映さんには……」

たてうちくんの声だ。

「しあわせをたくさん知ってほしいと思ってるんだ」

確かにそう聞こえたあと、耳をつんざくほどの、大きな急ブレーキとクラクションの音が響いた。その音が事故の大きさをものごたり、私は震えた。

「聞こえました？」

「うん……」

「生きてるの、奇跡かもしれないですね」

ずるいよ、たてうちくん。たてうちくんがいなくなったら、たくさんのしあわせなんて意味がないよ。本当に、生きててよかった。そう思える人がいることを、私はたぶん、はじめて知った。

### SIDE-tateuchi

「使えそうなものってこれくらいかなと思って」

キタはそう言って、袋を手渡した。その形状から、エロ本とかいうボケはしてなこないというのはわかった。でもまさかこれを持ってくるとはな。ぼくはゲラゲラ笑い転げた。

「腕折れてるのに、グローブって」

「センスいいと思ったんだけど」

確かにセンスがいい。というかやっぱりキタはぼくのツボをわかってるな、そう思った。そういうボケ方をしたあと、ちゃんと着替えやら日用品やらを渡してくれた。それは確かにぼくのものなのだけど、最近使ってないもので、少し懐かしい気さえた。その懐かしさの記憶は、袋を開けたときの匂いで、すべて甦った。

「これ、俺の部屋にあったものじゃないしょ」

そう聞くと、キタは感心したように「おー、やっぱりわかるんだ」とうなずいた。

「わかるよ。でも、なんで彩映さんの部屋にあったのを、キタが持ってくるわけ？ 彩映さんと会ったの？」

そうだ、これは彩映さんの部屋に置いていた、ぼくの日用品だ。置きっぱなしにしたままぼくらは別れたのだ。

「うん、会ったよ。昨日たてちゃんの家に行ったら、玄関の前にしゃがみこんでて、声かけられて、話してみたら彩映さんだった」

「ウチ来たって？ なんか用あったのかな」

「詳しいことはわかんないけど、今日会わないとダメだ、みたいなこと言ってたよ」

「そうか」

ぼくは少し考え込んだ。彩映さんになにかあったのだろうか。少し心配になる。

「たてちゃんの荷物取りにきたって言ったら、じゃあ、うちにあるの持ってくるからって、それ渡されたんだ。でも不思議なんだよなあ。すごく会いたがってたのに、一度帰って、荷物持ってきたときには、やっぱり病院には行かないから、渡してくれって言われて」

「そうか」

そうかを繰り返すしかなく、ぼくは言葉に詰まった。もともとぼくも携帯電話が壊れてしまって、彩映さんに連絡をとることはできなかったのだ。それならそれで仕方ないので、そのうち事情でも話そうと、そんなことをのんきに思っていたくらいだった。

「まあ、でもたてちゃんと彩映さんて、やっぱり不思議だよな。ふたりの話を聞いている限りは、なんというか、お互い思い合ってる気がするんだけど。それだけじゃダメなわけか」

「まあね」

ぼくは続く言葉が見つからずに、窓の向こうに目をやった。それを察したかのように、キタは「じゃあ、また来るわ」と言い、病室を出た。

「またなー」

「おう」

そのやりとりが消えたあと、おもむろに、彩映さんの部屋の匂い染み付いた袋から洗顔フォームを取り出した。

「あ」

袋の中に手紙らしきものが入っている。それを取り出して、ぼくは広げた。そういえば、彩映さんに手紙をもらうのはじめてだ。"たてうちくんへ"という封筒の文字は、思いの外きれいに整っていて、少しの間、その字の形に見とれてしまった。そうしたあと、ようやく中身に目をやると、そこには、少ない文字が、静かに並んでいた。

"たてうちくん、いつもありがとう。

怪我が治ったら、また会ってください。

それまで、たてうちくんに会うのを我慢します。

ほんとに、生きてくれていて、よかった。

ありがとう”

そう書かれた手紙をぼんやりと何度も読み返した。何度読んでも字数はいつも同じなのだけれど、その字と字のすきまから、彩映さんがそれを心を込めて書いたことが伝わった。ぼくは彩映さんにありがとうと言われるようなことを、あまりしてこなかった気がしている。していたなら、もう少し思いやった付き合いができたはずなのだ。なのに”ありがとう”なんて。そう思って少し感傷的になっているとき、カーテンの向こうから声がした。

「ねえ、おにいさん」

カーテンの開く音がある。ぼくも同じようにカーテンを開けた。

「グローブがなんとかって……」

隣のベッドにいたのは、中学生くらいの少年だ。

「ああ、これ？」

キタが持ってきてくれたグローブを手にとる。

「ああ、それ。ちょっと見せてもらっていい？」

「いいよ、ほら」

グローブを手渡すと、少年は慣れた手つきそれをはめ、でパンパンと音を鳴らした。

「おにいさん、内野手？」

どうやら彼も野球をやっているようだ。内野用や外野用という言葉はやっていなければ出てこない言葉だ。

「セカンドだった。きみも野球やってるの？」

「うん、まあ」

そう言って少年は、グローブと一緒に渡したボールをぼくに投げた。ぼくはあわてながらもそれをキャッチする。

「たしかにセカンドっぽい捕り方だ」

と、少年は笑った。”セカンドっぽい”というのを言葉で表現するのはなかなか難しいけれど、彼の言いたいことはなんとなくわかる。さらに言えば、典型的な「二番・セカンド」といったところか。とにかくつないで走者を進めるような役割だ。そんなことを思ってボールを投げる。少年はそれを取る。彼はたぶん「ショート」だと思って聞いてみたら、案の定それは当たっていた。

「おにいさんは、彼女いるの？」

唐突に聞かれて、少しあわてた。

「彼女？ いないよ」

「でもなんかそんな話してたよね？」

「まあ、それはオトナの話だ」

ぼくはわざらしくそう言った。 ”オトナの”という言葉に反応して少年は、食いついた。仕方がないので、そういう話をヒソヒソとしてあげることにした。それを彼は興奮しながら聞いていた。その感じがぼくには懐かしい。まだ知らないものへの妄想というのは、限りなく透明でピュアなのだ。ただのエロとは違うのだ。なんて高尚なことのように思うのも、間違いではない気がした。

「いいねえ、オトナってやつは」

少年はふいにつぶいた。

「まあ、心配しなくても、勝手にオトナになるから」

なにも考えずそう答えると、

「だといけどね」

と、少年はあきらめたようにつぶやいた。頬を伝うひとつぶの涙は、窓からの光で、キラキラと輝いた。それはやはり、透明でピュアなものにぼくには見えた。もしかして、ぼくは彼を傷つけたのかもしれない。それをごまかすように、

「でも、オトナはこどもがうらやましいときもあるから」

そうしてみると、彼は、

「それは知ってるよ」とまた笑った。

それ以来、ぼくは彼とキャッチボールを繰り返した。それは、彼が亡くなる前の日まで続いた。

\*

キャッチボールの音が聞こえなくなった病室は、それだけで静かすぎるほどだった。たまに来るキタや河合さんや友達の声は、それをかき消してくれるけれど、彼らが帰ると、また、病室は静寂に包まれた。ぼくはひとりグローブをパンパンと鳴らす。その音で気分を紛らした。

「あの、たてうちさん」

そう言って病室に入ってきたのは、亡くなった少年の母親だった。何度か顔を合わせているのですぐにわかって、ぼくは「ああ、どうも」と軽く会釈をした。

「どうですか、怪我の具合は」

「はい、もうだいぶよくなって、もうすぐ退院できそうです」

「そうですか、それはよかったですね」

「はい」

そう言ったあと、少しの間があいた。グローブを鳴らす仕種をしてその間を埋めていると、少年の母親はぼくに手紙を差し出した。

「これ、あの子の枕の下にあったので。あなた宛てだったようですが、すみません、読んでしまいました。でもよければ、あの子の願い叶えてもらえませんか」

そう言われてぼくは手紙を受け取り、封筒から便せんをそれを広げて読み始めた。枕の下に置いてあったせいか、少しよれていて、その文字はにじんでいる部分もあった。

"たてうちさんへ"

柄にもなくこんな手紙を書くのは変な気分なんだけど、おれはたぶん、先が長くないので書きます。先が長くないと言っても、14年は犬なら大往生だし、まあいいかなと最近は思ったりします。とかいう話をしたらこの前は怒ってたっけ。やっぱり大人にもなりたかったかもなー。

ところで、気づいてないと思うけど、おれはたてうちさんと会ったことがあるよ。えっと、覚えてるかなあ、ちょっと前、球場の自販機の前で。あのときのセカンド、おれです。ショートだって言ったけど、嘘つきました。理由は別にないんだけど、なんとなく（笑）

やっぱり今でもセンター前の打球捕れなかったのは悔しいけど、あのとき「いい試合だった」と言ってくれたことは、心に残っています。

それからこうやって毎日、キャッチボールできたこと、  
すげー楽しかったです。マジです。感謝します。

それからひとつ、お願いがあって。

おれ、好きな子いるって言ったじゃん。

2枚目にその子に伝えたいこと書いたから、

たてうちさん、それ渡してくれない？

おれには恥ずかしすぎて、直接伝えたらそれこそその瞬間死んでしまいそうで（笑）

よろしく。

んじゃ、そういうことで。

2枚目は読まずに、それだけ読み終わると、ぼくは彼の母親に返事をした。

「ぼくでいいんですかね」

母親はちいさくうなずいて、

「はい、そうしてくれると、あの子も喜ぶます」

とほほえんだ。

「わかりました。退院したらすぐにでも」

こんどはぼくがセンター前に抜ける打球に飛びつく番だな。そう思った。

## #44 ラブレター

「校門の前でヒッチハイクしてる人がいる！」

ホームルームの終わった教室で、誰かがそんなことを言った。そんなわけのわからぬことあるわけないと思いつつ、きっちりとあたしはやじうまになって、外をのぞいた。ほんとだ。ああ、世も末だ。スケッチブックをかかげて、男が校門に立っている。三十前後だろうか。遠目からははっきりとわからないけど、どこにでもいそうな男だ。どこにでもいそうな男が、おかしなことをする。ああ、やっぱり世も末だ。この先、いいことなんてあるのかな。オガワくんが死んでから、私は少し刹那的だ。

「2-4 ……、高梨友香さん……？」

隣にいたチカがあたしの名前を呼んだ。

「なに、急に」

チカのほうを向いて、あたしは聞いた。

「あれ、ヒッチハイクじゃなくて、友香のこと探してるんじゃない？ スケッチブックに名前書いてあるよ」

「すごいね、あの文字見えるの？ あたし、ぜんぜん見えない」

「あのさあ、そういうことじゃなくて、あの人誰なの？」

「え、さあ……」

「知らない人？ もしかしてストーカーとか！」

「そんなのいないよ、たぶん」

と言いながら、少し不安な気持ちになった。でも、あたしに用事があるなら、それが何かは気になる。やじ馬でござった返すベランダに出て、あたしは大きな声を出した。

「あの一！ 高梨友香は私ですけどー！ 何か用ですかー！」

「ちょっと、やめなって、危ないよ」

他のクラスメイトが私を心配する。「いや、でも……」と口ごもっていると、校門のほうから返事が聞こえた。

「オガワユージくんから、手紙預かってる！ 君に渡してほしいと言われた！」

オガワくん？ え？ どういうこと？ 頭のとっぺんからつま先まで、ビリビリとして、次の瞬間には、駆け出していた。オガワくんが私に、手紙？ なんで？ なんで私に？ 駆け出す足とともに、鼓動が速くなる。全身のビリビリは続いたままだ。夢の中で足をバタバタ動かしている感覚で、ちゃんと進めてるのかよくわからない。それでも、気が付くと私は校門までたどり着いた。

「あの……」

息を切らしてその人にそう声をかけた。よく見たら、思ったよりも若い気がした。

おそらく二十代半ばくらいだと思う。

「君が、高梨さん？」

「はい」と私は答えた。

「もうちょっと早くきてくれないと。不審者に思われるしょ」

その人は冗談ばく笑っている。どこから見たって不審者だよ、そう言いたかったけれど、息が切れて、言葉にするのが面倒だった。

「すみません」

なんであたしが謝らなきゃいけないの。そんなふうになんか不満に思っているとき、

「これ、オガワくんから」

そう言って、その人はよれよれの手紙を差し出した。あたしはそれを受け取って、

「あの……、あなた誰ですか？」

と聞いた。

「彼のともだちだよ。じゃあ、確かに渡したから」

そう答えて、その人はさっさと行ってしまった。あたしはそれを引きとめもせず、その人の後ろ姿をただ見送った。それからよれよれの手紙をしばらく見つめた。

「誰だったの？」

いつのまにかチカが校門まで来ていた。  
「オガワくんのともだちだって」  
あたしはそのままを言った。  
「オガワくんの？ そうなんだ……」  
「帰ろうか？」  
「うん。でもストーカーじゃなくてよかったね」  
「やめてよ、そんな怖いこと言わないでよ」  
あたしはオガワくんの手紙をかばんにしまって、帰り道をゆっくりと歩き出した。

\*

「もしかしたら私、あの人見たことあるかも」  
チカはその人が写真屋さんではないかと言った。デジカメや写メじゃなく、外見が本の形をしたトイカメラでよく写真を撮る。そのカメラのフィルムは特殊なもので、写真屋さんに持っていかないと現像できないのだ。そのとき、彼に似た人を見た気がすると、彼女は言っていた。それを聞いた私はその写真屋さんに向かった。手紙のお礼を言おうと思ったのだ。手ぶらでそこに行くのは気が引けたので、何枚か撮っていた使い捨てカメラの写真を現像に出すことにした。余っていた残りのシャッターは、適当に空なんかを撮って切った。そうやってせっかく写真屋さんに来たけれど、そのときはその人はいなくて、仕方なく現像だけ出して帰ることにした。1時間もしないうちにできあがると言っていたけれど、その日は彼はきつといないだろうとあきらめて取りに行かなかった。それから何日かした日曜日、写真屋さんから電話があった。写真を取りにきてくださいという電話だ。私はすっかり忘れていたけれど、電話のその声があつた男の人だとわかって、すぐにそれを取りに走った。  
「相変わらず、来るのは遅いんだねえ」  
たどり着くと、写真屋さんはそう言って笑った。  
「すみません」  
また謝ってしまった。でも不機嫌になってもいいことはないので、  
「でも、なんで私ってわかったんですか？」と疑問に思うことを聞いた。  
彼は電話越しで、私だと気づいていたのだ。カメラを出したときには会っていないというのに。  
「なんでって、ちゃんと名前控えてるからでしょ」  
ああ、そうか。それはそうだ。私は恥ずかしくて、少し顔を赤らめてしまった。  
「えーと、あの……」  
私が返事に困っていると、彼は「写真、こちらで間違いないですか」と写真を取り出した。そこにはオガワくんと私が写っていた。そういえば、球場で撮ったんだっと思い出した。  
「あ、はい…… あ、あの、ありがとうございました、手紙」  
「手紙？ ああ、あれなんだった？ ラブレター？」  
ラブレターか…… いや、ラブレターとかいう甘いものではない。ただ、オガワくんは私に……  
「とても素敵な手紙でした。もっと生きたかったけどって…… あの……」  
私は急に気持ちがこみあげてしまって、涙をこぼしてしまった。それを止めようとすればするほど、涙は増えてくる。困ったな。こんなつもりじゃなかったのに。  
「どうした？ だいじょうぶかい？」  
写真屋さんはハンカチを渡してくれた。私はそれを受け取り、涙を押さえながら言った。  
「俺のこれからの幸せを全部やるから、高梨はきつとずっと幸せだって……」  
写真屋さんは、「そうか、それはよかったね」とゆっくりうなずいていた。しばらくして涙が止まった私は、ハンカチを返そうとしたけれど、洗って返すべきかと、少し迷った。  
「いいよ、そのままです」

私の迷いが見破られたように、そう言われて、私はそれに甘えた。

「すみません。ありがとうございます。あの、ほんとにありがとうございました」

そう深くお礼をすると、

「いや、俺もありがとうだよ。なんかいろいろわかったから」

「わかったって？」

「いや、こっちの話」

私は少し首をかしげながら、写真を受け取って、また深くおじぎをして外に出た。オガワくんと写真を取り出して見ている。いい顔してる、彼も私も。次の写真を見ると、適当に撮った空が写っていた。何も無いはずの青空に、オガワくんの言葉が浮かびあがった。

”高梨はずっと幸せだ”

その声が聞こえたようで、今度は笑顔になった。まったく気持ちは忙しい。ありがとう、オガワくん、君のことはずっと忘れないよ。空に向かってそう、つぶやいた。

## #45 マジックアワー

携帯電話が壊れて、いろんな人の連絡先がわからなくなってしまった。バックアップを取っていなかった自分が悪いのかもしれないけれど、電話番号やメールアドレスだけでつながっている人の存在は、なんてはかないのだろうと思う。気を抜いたらいつでも関係は終わるのだ。ぼくはそんなことを考えた。

彩映さんの番号も覚えていない。でも、彩映さんの家と働いている手紙屋さんの場所は覚えている。家に行くのはやっぱりよくない。手紙屋に行くことにしよう。もし彩映さんがいなければ、また明日行けばいいだけだ。うん、そうしよう。そうやって仕事の終わりに決意をしていると、「おつかれさま」と立て続けに声をかけられた。キタと河合さんだ。

「おつかれさま」

そう返してすぐ、キタが言葉を続けた。

「そういえば、彩映さんとは会ったの？」

キタはぼくの心を見透かしたのかと、ちょっとあわてて、それからそれを悟られないように普通に答えた。

「ああ、今日会いに行こうかと思ってたところ」

河合さんが口をはさむ。

「あ、彩映さんて、あの元カノですよ」

「そうだよ」

「やっぱりそれ、わかんないです」

カラオケのときと同じセリフだ。少し懐かしくて微笑んでしまっていると、キタがフォローするように言った。

「まあまあ。いろいろあんのさ、たてちゃんと彩映さんには」

ぼくはそれをあんまり真剣には聞いていなくて、キタと河合さんの親密な雰囲気気に気を取られている。単刀直入にぼくは、「付き合ってたの？」と聞いてみた。ふたりは目配せをして、笑った。そういうことね。それはよかったと、心から思い、ぼくは仕事場をあとにした。

手紙屋に来るのは久しぶりで、なんだか少し緊張した。付き合っているときも、何度かしか来たことがなく、どんなふうにして入ろうかと、店の手前でいろいろとシミュレーションを繰り返した。「やあ、元気？」こんな感じか。いや「どーもー！ ケガ治ったぜー！」こんなノリか。それとも、「素敵な便せんありませんか、お姉さん」とかいう演技でもしてみるか。そんなことを考えて、答えが見つからないでいると、店の中からドアが開いて、人が出てきた。

「あれ、たてうちくん？」

彩映さんだ。

「あ、ああ、えっと、仕事終わり？」

声は少し上ずった。

「うん、退院したんだね、よかった」

彩映さんは冷静だ。

「あ、もうすっかり元気だよ」

ぼくも少し落ち着いてきた。

「ちょっと話そう？ 歩きながらでも」

「そうだね」

そうやってぼくらは歩き出した。

歩きながらの話は、どこかぎこちなかった。久しぶりだからだろうか、いつもの感じが思い出せない。今日は天気がよかったねとか、仕事は順調？ とか、あのアイスおしかったねとか、キタに彼女ができたよとか。当たり障りのないことばかり、話していた。

「なんか、少し違うね」

彩映さんもそう言って、沈黙の時間が何度か続いた。

「ねえ、ちょっとそこに座って話そうよ」

通りかかった公園で立ち止まって、彩映さんはそう提案した。それがいいとぼくも思って、公園のベンチにふたりで腰かけた。外は夕暮れで、ベンチは赤なのか紫なのかオレンジなのかわからない色に照らされていた。

「マジックアワーだ」

ぼくがぼつりとつぶやくと、彩映さんは、首をかしげた。

「マジックアワーって？」

「太陽が落ちて、完全に夜になる前の、この時間のこと。今が一日でいちばん美しい時間なんだよ」

彩映さんは「へえ」とわかっているのかどうかよくわからない言い方をした。それは、いつもの彩映さんだと思い、ぼくは安心した。それからぼくはバックから、軟式ボールを取り出した。オガワくんとキャッチボールしていたあのボールだ。ぼくはなんとなくそれを、オガワくんの形見のように持ち歩いてきた。

「キャッチボールしよう」

唐突なぼくの提案に、彩映さんは「うん」とためらいもなく答えた。ぼくらは立ち上がって、少しだけ離れた。そして、彩映さんでも取れそうな、ふわっとしたボールをぼくは投げた。それを彼女はしっかりキャッチした。

「ナイスキャッチ！」

と、褒めてみると、「これくらい取れるよ」と少し怒ったふうに言った。それから、今度は彩映さんが、「私ね」と言いながらぼくにボールを投げた。「うん」と答えて、逸らしそうになるボールを取った。それをまた彼女に返した。

「ほんとはすぐにでも会いに行こうと思ってたんだけど」

ボールが返ってくる。

「うん」

ボールを返す。

「なんかわからないけど、あのとき会いに行ったら、好きになってしまいそうな気がしたの」

キャッチボールは続く。

「そうなってもそれは錯覚だよ」

「錯覚でもそうになってしまいそうで。だから、確かめたかったんだ。しばらく会わなかったらどんな気持ちになるのかって」

「そうか。それでやっぱり錯覚だって気が付いたんでしょ？」

「そんなことはないよ」という言葉を、少し期待している自分がいて、胸が痛んだ。でも彼女は「うん」と答えた。

「ほらね」

強がりが少しは混じっている。

「ごめん、変なこと言って」

「変じゃないよ。もともとそうだったんだから」

「でも」

ぼくは彼女の言葉をさえぎって、続けた。

「今日さ、中学生が写真を取りにきたんだけどさ」

「うん」

「その子、好きな人から手紙をもらってね、泣いてた」

「泣いてたの？」

「そう。泣くほどの想いがあるのって、いいと思った」

「そうかな、泣くのはやっぱり悲しいよ」

「彩映さんは、あんまり泣かないよね。けど、俺、たぶん、彩映さんは悲しくないから泣かないんじゃないかって、悲しくても泣けないの、知ってると思うよ」

「よくわかんないけど、なんとなくわかる」

彩映さんのボールは相変わらず変な方向に飛んできて、逸らしそうになる。でも、まだ逸らしていない。

「そういう人と、恋したらいいんじゃない？」

「たてうちくんじゃなくて？」

「錯覚でしょ、俺は」

「そうだけど……」

ぼくは一息ついて、冗談ぼく、でも本当の気持ちも伝わるように、言ってみた。

「あーでもさ、彩映さん、おばあちゃんになって、そういう人がいなかったら、俺、結婚してあげるよ」

彩映さんは小さく笑って、「変なプロポーズだね」と言った。そして、そのとき返ってきたボールは珍しく胸の位置に届いた。そのときマジックアワーが終わって、暗闇を街燈が照らした。ぼくらがこの先、どんなふうになっていくのかはわからない。明日からもう会わないと思うこともあるかもしれない。それでもきつとかまわないと、ぼくは思った。いま言えるすべての想いを、ちゃんと届けたからだ。

街燈に虫が集まっている。その上には大きな満月が、優しく光っていた。

エピソード ダ・カーポ

## #46 スプーン

---

公園でキャッチボールをしているカップルを横目に歩いていると、一瞬、大きな風が吹いた。ぼくは顔をそらして、目をつぶる。大きな風はほんとい瞬で、それがそよ風になると、ぼくは目を開けた。そして、足元に何か落ちていることに気が付いた。写真？ それに手を伸ばして確認してみる。うん、やっぱり写真だ。親子が飛行機の窓から、虹を見ている。誰かが落としたのだろうか、まわりを見渡したが、キャッチボールをするカップ以外ひと気はない。ぼくはなんとなくその写真をポケットにしまった。

「カレーなんだけど、たまご忘れたから、買ってきて」

写真と入れ替わりに取り出した携帯電話には、そんなメールが入っていた。 またあの、“食べにくいことこの上なし”のスプーンで食べることにするか。きっと妻もそのつもりなのだろうから。たまごを買って、はやく帰ろう。ぼくの足は、早足になっていく。

この作品の評価をお願いします。

わかれのまえにみるけしき

<http://p.booklog.jp/book/25393>

著者：ゆひ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yuhibook/profile>

表紙素材：六花工房

<http://www.s-nanto.com/snow/index.htm>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25393>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25393>